

ろうきん森の学校 20 周年記念シンポジウム

報告書

目次

1. パネルディスカッション

「里山コモンズとしてのろうきん森の学校の意義」	1
-------------------------	---

2. 当日報告資料

リレー報告「ろうきん森の学校の 20 年のあゆみ」

1) 全国事務局	27
2) 福島地区	34
3) 新潟地区	41
4) 富士山地区	48
5) 岐阜地区	53
6) 広島地区	59

3. 参考資料

1) さとやまコモンズ自然学校とは（ひろしま自然学校 古本敦子氏）	67
2) さがみこファーム事業紹介（さがみこファーム 山川勇一郎氏）	73
3) NPO とは何かを考える（慶應義塾大学 宮垣元氏）	84
4) 当日配布資料（ゲストプロフィール、5 地区概要等）	88

※シンポジウムの映像は右 QR コードからご覧いただけます。
(ろうきん森の学校公式 Youtube チャンネル)



ご挨拶

労働金庫連合会 50 周年記念社会貢献活動として 2005 年 10 月に開校した「ろうきん森の学校」は、おかげさまで 20 周年を迎えることができました。2025 年 3 月 14 日には、労働金庫連合会にて、20 周年記念シンポジウムを開催しました。

これまでご支援くださった皆さまに心より感謝申し上げます。

「ろうきん森の学校」は、日本の里山再生をテーマに、労働金庫連合会が活動資金を支援し、NPO 法人ホールアース自然学校を主管団体として実施する環境教育事業です。

- ①森を育む（植樹、間伐・下刈り等の森林整備活動）
- ②人を育む（森づくりや環境教育リーダーの育成）
- ③森で遊ぶ（里山を活用した自然体験・環境教育プログラムの開発と実施）

という 3 点を活動の柱として位置づけ、現地の NPO が中心となって地域の皆さんと共に多様な取り組みを展開してきました。

福島（いわき市）、富士山（富士宮市他）、広島（北広島町）の 3 地区で 2005 年度に開校し、2014 年度まで 10 年間にわたって活動してきました。さらに 2015 年度から、ろうきん森の学校は、労働金庫連合会 60 周年記念社会貢献活動としてさらに 10 年間で「第Ⅱ期」と位置づけ、新潟（上越市）および岐阜（美濃市）の新たな 2 地区を加えた合計 5 地区で、「森づくり」から始まる「人づくり・地域づくり」につなげる環境教育を、さらに発展させることを目的として事業を継続してきました。

2025 年 3 月末時点で、のべ 28 万 6,203 人の方が活動に参加し、企業と NPO が協働で取り組む活動としては、全国に例を見ない実績となりました。こうした実績を踏まえ、ろうきん森の学校は SDGs 達成目標の 2030 年に向けて、引き続き取り組んでいくこととなりました。

2030 年に向けて、日本の里山地域はこれまで以上に過疎化・高齢化等の影響を受け、様々な社会課題の最前線となるでしょう。私たちの役割は、過去 20 年間の成果と課題を整理しつつ、これからの日本の社会に求められる視点をしっかり盛り込んだ質の高い活動を、地域の方々や労金関係者、現地 NPO と共に推進していくことだと考えております。

森での活動を通じて人と人、人と地域が健全に育まれる社会の実現を目指して、皆さまのご支援を賜りながら、「ろうきん森の学校」はこれからも歩みを進めてまいります。

2025 年 3 月

ろうきん森の学校全国事務局

（NPO 法人ホールアース自然学校内）

【開会】

それでは定刻となりましたので、ただいまから『ろうきん森の学校 20 周年記念シンポジウム「里山コモンズ自然学校としてのろうきん森の学校の意義」というテーマで、企業と NPO の協働による森・人・地域を育てる 20 年間の活動の軌跡と未来、ということで進めていきたいと思います。

本日、進行と後半のパネルディスカッションのコーディネーターを務めます、全国事務局を担当しているホールアース自然学校の大武と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

開会に先立ちまして本当に長きに亘ってご支援いただいている、労働金庫連合会の古川副理事長より一言ご挨拶をお願いいたします。

【古川副理事長あいさつ】

皆さん こんにちは。ただいまご紹介に預かりました労働金庫連合会で副理事長をしております古川でございます。よろしくお願いいたします。本日は、この東京神田の会議室に NPO の代表の皆さんはじめ 13 金庫の CSR 担当の皆さんがお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。



ろうきん森の学校も 20 年経ちまして、本日 20 年記念としてこのようなシンポジ

ウムが開催されることを大変嬉しく思っていますし、ありがたくも思っております。これまで皆さんご存知の通り、森の学校は全国 5 地区になりました。20 年間の参加のべ人数ですけれども、28 万人という大変多くの方が参加されたということでございます。本日も各地区の活動のまとめを報告いただくとともに、里山コモンズ自然学校というテーマでパネルディスカッションが開催されるということ、大変楽しみにしております。

最近、現代病というか「豆腐のメンタル」を持っている人がたまに出ますが、やはり木々とか森とか自然の中に行った方がやはり人間は心身とも健康になる、というところもあって、ろうきん本体としても森の学校を利用させていただいて、新入職員から研修をしたり、メンタルで休むような人がいればできれば、家に閉じこもって休むのではなくて、森の学校で自然の中で体を動かした方が本当は健康なんじゃないかと、私は個人的には思っております。

先ほどのべ 28 万人という参加者、というお話させていただきましたが、私個人的には何回も参加しているわけじゃなくて少ないのですが、監事をやっている糸谷さんが、その分活躍していただいて、28 万人のうちですね 1% ぐらいは行っているんじゃないかな、という風にも思っています。10 年・20 年を 1 期、2 期って続けてきたわけで ございます。これを周年記念行事としてやってきたわけですが、今回一応 20 年を区切りとして、周年行事としては区切らせていただき、今までと同様に様々な形で応援、または必要なものに対しては協力させていただく、という体制を整えていきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

20 年経ちましたけれども、この先 10 年、20 年って続いていければなと思っていますし、様々な形でもっと我々も参加する形を、色々変えながらもできればなと思っております。

ます。労働金庫連合会も3月23日でちょうど70年を迎えますけれども、特に70年だから何かするかというとそんなに派手なこととはしません。しかし、区切りとしてまた様々な形で皆さんにご案内させていただきたいと思います。これからもろうきん森の学校を様々な形でサポートしていきたいと思いますので、今日のパネルディスカッションも含めどうぞよろしくお願いします。

簡単ですがご挨拶させていただきます。よろしくお願いします。

【全国事務局と5地区のリレー報告】

※報告資料参照

【報告を聞いての感想や質問】

○静岡県労働金庫 富田氏

静岡ろうきんの富田でございます。報告ありがとうございます。たまたま私も今日、参加させていただいて後ほど情報交換会で少しご挨拶させていただこうと思っております。決して森オタクではないのですが、福島地区の「湯の岳山荘」に行ったことがあり、自然体験させていただきました。木田さんとはあの震災の直後にボランティアに行かせてもらって、当時やっぱり被災された方の痛みというのですか、そんなことを夜通し話したなっているのを思い出させていただきました。



グリーンウッドワーク協会の小野さんも、

労福協関係の視察でろうきん森の学校に指定される前に行ったことがあります。生木を使ってスプーンを当時作って、今も大切に持っています。

地元の富士山地区では、ホールアース自然学校とたまたま私が地元の支店長をやった時に、色々連携させていただきました。特に山崎さんからお話があった、あのコロナの時の辛かった時の話です。活動が止まってしまったということで、今日司会をやっている大武さんとも色々お話をさせていただきました。ろうきんの場合、金融事業を通じて働く方々とその家族に対して幸せづくりをしていくということなのですが、地域のNPOが本当にこう活動ができない、そして労働組合活動もその時はやはり活動が止まってしまったということで、どうしたらいいか非常に悩みました。コロナの事を思い出すと、皆さんも三密がダメだとか、飛沫を防ぐということで、プラスチックパネルなんか置かれ、全くこう建物の中で何かをやるってことができないと状況でした。じゃあ一体どういうことができるのだ、ということでホールアース自然学校さんと色々話をしながら、野外活動はできるのではないかと。

今日またお話を聞かさせていただいて、当時労働組合もこのまま何年もこれが続いたら労働組合費を引き下げるという話になってくるのではないかと、ということで非常に悩んでいました。金融需用以外になりますが、そういった地域のNPOそして労働組合が悩んでいるところを、うまくマッチングさせてその活動が今も継続しているということで、本当にいいきっかけだったなと思っております。

これからもこういったNPOとの活動っていうことも当然続けていきたいですし、引き続き地域のそういった活動は応援していきたいと思います。以上、感想を含めてですがありがとうございます。
○労働金庫連合会 糸谷氏

労働金庫連合会の糸谷です。富田さんの話を伺って喋りたくなっちゃったので、ちょっとだけ。冒頭副理事長の挨拶で、のべ人数の 1%ぐらいはお前だ、みたいなことを言われました。そうすると 2800 人でちょっとそれは無理だと思うのですよ。でも、思い出してみると 100 回以上は参加しているなどは思います。



ろうきん森の学校には、2 年目から携わらせていただいています。私どもの職員と各地区さんとの関わりという部分で、一言申し上げたかったのは、やっぱり最初ちょっと距離感が互いわからなかったというのがあります。おそらく NPO の皆さん方は、こちらがある意味スポンサーですので、ちょっと気を遣われる部分もあったのではないかと。今だから言うのですが、やっぱり少しうさん臭い団体じゃないか、と若干そういう思いがありました。もちろん支援をさせていただき意義を認めたから、やらせていただいたのですが、具体的にどういうコラボをしたらいいか分かっているのか、と問われるとちょっとピンと来ないところは正直ありました。それで 1 つの試みとしてお金を出して終わりというのでは意味がないな、ということで職員自身が現地にお伺いをしてきました。ほとんど何の役にも立たないと思いつつも、参加をすることで

我々も活動が実感できるし、NPO の皆さんも支援してもらっていると、「金だけじゃなくて人も来た」と受け止めていただけるのではないかと。

最初は非常に無理をしながら、いわきに行けば温泉に入れるぞとか、富士山に行けば富士宮焼きそばが食えるぞとか、広島に行けば宮島へ帰りに寄れるぞとかですね。そんなことも言いながら職員を引き連れて、訪問させていただくところから始まり、今では若手もそういった部分を引き継いでくれて、ごくごく自然に NPO の皆様と職員が交流させていただきながら一緒に活動させていただく、ということはあるようになったと大変ありがたく思っております。

私もかなり老兵の部類に入ってしまったので、体力を維持してですね、できることは限りがあると思うのですが、今後ともよろしくお願いします。

【第2部 パネルディスカッション「里山
コモンズ自然学校としてのろうきん森の学
校の可能性」

大武：進行とコーディネート役を務めます、
全国事務局ホールアース自然学校の
大武です。よろしくお願いいたします。
まず冒頭に一言、声を出したほ
うが良いと思うので、パネリストの
皆さん、簡単にお名前と所属、今の
気持ちをお話してください。最初にゲ
ストコメンテーターとしてお招きし
ている慶應義塾大学の宮垣先生から
お願いします。



宮垣：初めまして。慶應義塾大学の宮垣と
申します。どうぞよろしくお願いいたします。
私はNPO研究をしている
学者の立場で今日は呼んでいただい



たと思うのですが、私がこの研
究を始めた時ってというのが1990年代
で、阪神淡路大震災が今年30年です
けども、そのちょっと前ぐらいなの
です。その時はNPOという言葉はも
ちろんあったのですが、ほぼ
誰も知らなくて、災害ボランティア
というの「ボランティア」なのだ、
ということが社会的に気づかれました。
そういう時代でその後NPOって
言葉が一般的にこう知られるようにな
ってくるのですけども、今日伺っ
てその30年経って当たり前のように
NPOという言葉が共通言語になって
いるってことが1つの感銘とい
うか、感慨深いものがあります。

もう1つは、同時にそのNPOという
言葉があまりにも一般的になっているの
だけども、よくよく考えるとその存在
ってよく分かってないかもしれないこ
ともあると思います。そういったこと
も今日一緒に考えていければいいのか
なと思って、楽しみにしております。

大武：続いてゲストパネリストの1人とし
てお招きしている山川さん。実は元
同僚でホールアース自然学校出身で
す。今さがみこファームという新し
いソーラーシェアリングの組み
組をされています。

山川：山川です。ろうきん森の学校に育
ていただいた1人だと思っております。
私は2003年にホールアース自然
学校に入って、2014年に辞めたので
ちょうど新潟と岐阜の皆さんとは入
れ違いでした。立ち上げから最初の
10年を担当させていただいたというこ
とです。「森を育む・人を育む・森で
遊ぶ」をテーマに、地域と共に歩む
というコンセプト作りみたいなところ
から関わっていたので、懐かしい

なと思いながら聞いていました。なるほど、原点がここにあったのかと改めて思いました。フィールドは違うけれども、ほぼ同じようなことやっていると感じました。



古本：ひろしま自然学校の古本と申します。今日こうやって皆さんの前で話をさせていただく機会をいただき、ありがたく思っております。自然学校の代表しているのですが、広島では新井監督と同期で、今年で2年目が終わりました、来年3年目ということになります。スマートには話せませんがよろしくお願いします。



渡邊：新潟地区のかみえちご山里ファン倶楽部から参りました渡邊です。よろ

しくお願いいたします。皆様のお手元にあるご案内のところにプロフィール載せていただいたのですが、ちょっとドキドキしながら見て、今日お話をさせていただくのはきっとこんなに緊張しているのはこの格好のせいだと思います。いつも森の学校でフィールドに出ている時の制服はこんな格好ではないです。



山崎：ホールアース自然学校の山崎です。このろうきん森の学校は20周年ですが、5年・10年・15年という節目で必ずこういうフォーラムをやってきました。これはほぼそうなのですが、それでも「森の学校」という響きのイメージから、木を植えて木を切って、自然観察のハイキングをして、という活動が多分思い浮かぶと思います。これは決して嘘じゃなくて日々そういうこともやっているのです。今日タイトルにもあるのですが、ろうきん森の学校の意義というのは、実はそういう目に見える体験の向こう側にもっとあるのではないかと。普段の活動の中では語り尽くせないような意義があって、そういうところについては5年に1回ぐらいはもう1回この現代的な意義と未来に対して、どうやって行こう

かまとめた方がいいのじゃないかということで年ごとにやらせていただいていた、今日もそういう時間なのかなと理解しています。森が好きな人たちの趣味の活動みたいに映りがちなのですが、決してそうじゃないのだということを、宮垣先生と山川さんにフォローしていただきたいと思っています。

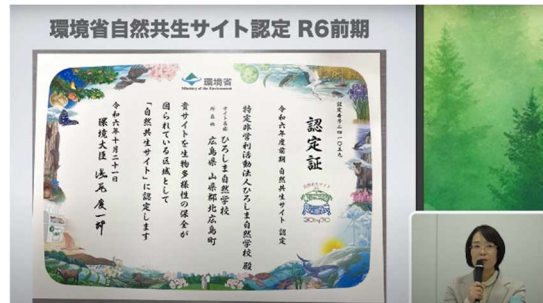
大武：皆さんありがとうございました。最初に話題提供ということで、「里山コモンズ自然学校」とは何か、どういう経緯でこのテーマが出てきたのかご紹介いただけますでしょうか。

古本：それでは少し時間をいただいております。里山コモンズ自然学校という言葉は、ひろしま自然学校が20周年を迎えて次の10年を考えた時に出てきたキーワードでもあります。なぜそれに至ったかと、その言葉にどのような意味を込めているのかということをお話させていただければと思っています。広島の話ではあるのですが、他の皆様にも共感していただける部分があればなと思いながらお話をさせていただきます。

【里山コモンズ自然学校について】

昨年の10月にひろしま自然学校が環境省の自然共生サイトっていうものに認定されました。最近、“ネイチャーポジティブ”とよく言われますけども、世の中の生物多様性保全の流れの中で、2030年までに陸と海の30%を生物が保全されている区域にしていこうという動きがあります。保護区以外の民間の活動をしているエリアも保全区域として登録していきましょう、という流れになっており、今回私たちひろ

しま自然学校は、自分たちのフィールドを自然共生サイトとして申請し、認定していただきました。



認定までの準備の段階で、私たち現場でかなり汗をかいたのですが、そのときやはり「ろうきん森の学校のスキームがあってこそ、認定してもらえたことができた」と実感しました。

ここで、改めてなぜ今生物多様性保全なのか、という話をさせていただきます。地球環境問題に様々な対策がありますが、現在は、生物多様性保全がトレンドのような形で注目されていると思います。そう言われるようになった背景に、世界の経済が自然の資本に依存しており、動植物に依存しているGDPが世界のGDPの52%というデータがあります。つまり、生物多様性を損失すると、経済にも大きなリスクがあるということなのですね。例えば、原材料は様々な動植物に依存しているので、調達に影響があったり、消費者の需要や投資家の意識も変わっているので、生物多様性に配慮しないことがビジネスにとって様々なリスクを生んでしまうということになります。

そういった世界の動きの中、環境省としても、生物多様性保全を進めていくには地域で地道に保全活動をしている団体と企業がマッチングするのが効果的だということで、大々的に進めています。実際に私の周りの団体も、環境省に相談して企業を紹介してもらった例があります。また、県や自治体でもそういったマッチングの仕組みを

独自に整えているところが出てきています。企業が団体を支援するということは、まさにろうきん森の学校の枠組みなのですけれども、やはり、これが20年継続されているというところが大きいと感じています。長年支援していただいたおかげで、広島地区の例で言うと、ゼロからハード面が整備でき、専従の職員を雇うことができ、さらに全国の他の地区との連携によって活動の質がすごく上がったというのが実感としてあります。

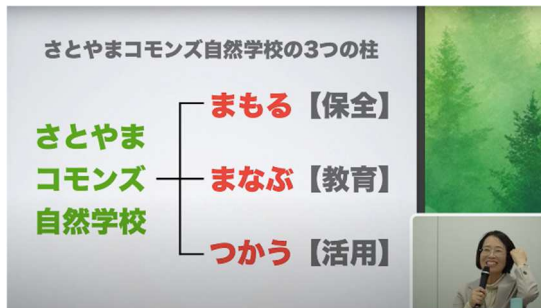
先ほどありました自然共生サイトの申請手続きにあたって、私自身、自然学校の姿を改めて捉えなおすことができました。この申請にあたって、必要な情報がいくつかあるんですけど、まずは土地の境界図を書かなければならないので、土地の範囲をもう一度見直すということ、そして、地権者に対し申請への理解と許可を得なければならないということ、それから、モニタリング調査の情報を整理し生物多様性の価値を可視化すること、最後に、今後の方向性や計画を明示する必要があります。そういった書類を整理していくプロセスの中で、自分たちは「里山コモンズ」なんだと改めて感じました。

「里山コモンズ」は、里山を活用するために共同管理をしている、というようなイメージです。全国の自然共生サイトは、生き物を守ることが第一の目的にある場合も多いのですが、私たちの場合は、あくまでも里山を自然学校として活用してきた結果、生き物が守られてきたということが特色だと思っています。コモンズというのは、「共有財産」といったような意味なのですが、例えばある集落で、山の中で範囲を決めて、その中で集落の人々が薪をとっていいようにルールを決めることが昔はあったかと思います。そのような、クローズドなエリアを共同で管理し、共通の利益を得

るということが、コモンズの従来のイメージです。ただ、ひろしま自然学校の場合は、7人の地権者さんと水利組合の方にご理解いただき土地を10年単位でお借りしているんですが、クローズドな場所ではなく、誰もが気軽に利用できる里山として開放してくださっています。つまり、自然学校的な“さとやまコモンズ”とは、地主さんのような里山に縁とゆかりのある人が、外から来た縁もゆかりのない人に対して、個人の所有物である里山を開放することで様々な縁を生み出し、それが結果的に里山の課題解決につながる、といった枠組みになります。実際に、長年森の手入れをしてくださっているボランティアの方に話を聞くと、「自分たちはここで遊ばせてもらっているんや」「楽しませてもらっているんや」というように言ってくださっていて、私たちは本当にありがたいなと思うと同時に、里山の活動がそういった方々にとってのウェルビーイングになっているのかなとも感じています。

不易流行という言葉がありますが、やはり、昔からあるコモンズに対して、新たなコモンズ概念を創造していくことも大切かなと思っています。今までの、閉鎖的であったり、画一性があったり、強制力があつたコモンズから、開放性があり、多様性があり、ゆるやかなつながりがあるという在り方のコモンズを運営していくといいのかなと、20年をふりかえって皆で考えたところです。

さらに、自然学校的さとやまコモンズを持続可能にするために、大切だと思う2つのことがあります。ひとつは、いろんな市民の方が、民主的・水平的にコモンズの共同管理に参加・参画すること。もうひとつは、里山が人間だけではなく全ての生き物、みんなのコモンズだということをベースに考えるということだと思っています。



さとやまコモンズ自然学校には「まもる」「まなぶ」「つかう」という3つの柱がありますが、これはろうきん森の学校の指針にも当てはまるかと思います。やはり、「まもる」というのがちゃんとあるのがろうきん森の学校だなと思います。保全活動や森の整備を継続していくことに価値がありますし、さらに「まなぶ」が充実しているのが、自然学校らしい自然共生サイトだと思います。そして「つかう」ことで、自分たちもメリットを感じたり、ウェルビーイングを感じられ、結果として人が集まり収益をあげられるというところが経済的な持続可能性につながっていくと思っています。

この3つの柱を軸に、今後10年の活動を進めていきたいと思っています。

大武：古本さんありがとうございました。

実はこの話、昨年12月に広島地区で中間事務局会議が開かれ、その場でひろしま自然学校前代表の志賀さんから、こういうコンセプトで次の10年の活動を考えているのだけれどもみんなどう思う、みたいな形でご紹介いただいたのです。その時初めて「里山コモンズ自然学校」と聞いて、なるほどろうきん森の学校で自分たちがやってきたことが、こういう形で整理できそうだなと、非常に腑に落ちた感覚を今でも持っています。古本さんの発表を受けて富士山地区

の山崎と新潟地区の渡邊さんに最初に質問です。里山コモンズ自然学校というこのコンセプト、率直な感想というか受け止めをそれぞれ聞かせてください。

山崎：コモンズってなかなか聞きなれない方もいかもしれませんね。共有資源とか共有地と言われるのです。要はみんなのものということです。学生の頃、経済を勉強した人は「共有地の悲劇」というのを聞いた人もいるかもしれないのですが、この背景には日本の環境問題っていうのは、人が化石燃料を使いすぎで起こる気候変動みたいな環境問題と、



里山のように人が関わらなさすぎて生態系が荒れていくとか、地域が衰退していくという、利用しなさすぎの問題があるのです。利用しなさすぎ問題を解決していくために、ろうきん森の学校もあって、人がどんどん来るようになって開かれた共有地を「里山コモンズ自然学校」というネーミングにすれば可能性があるのではないかという話だったのです。ただ「共有地の悲劇」というのもあります。これは「みんなのもの」だということで、誰かが自由に使い過ぎてどんどんその資源を利用しよう

とすることで、一気にダメになるっていう側面があります。これはコインの裏表の話なのですが、僕が今後向こう 10 年、20 年行けるのではないかと思ったのは、悲劇が起こるっていうことも含めて地域の活動に根差した、本当に土着の NPO がコーディネートができる能力を持ってきたということだと思います。

共有地の悲劇が起こらないように、地域をある程度ゆるくつなぐということ古本さんも言っていましたけれども、緩い合意でコーディネートできるのじゃないかという自信があって、あのコンセプトが出てきたのではと思います。これがろうきん森の学校全体のコンセプトにこれからなっていくとするならば、他の地区も地域でそういう振る舞いができるよう、もっと磨きをかけていかなきゃいけないのかなと気持ちを新たにしていたところです。

渡邊：改めてこのお話を伺うと、私たちが新潟でがむしゃらにやってきたことが、こうやってなんかすごくすっきり整理していただいて、私たちのことを言ってくれているみたいな感覚になります。自分たちはこんなこと意識してはいないけれど、でもこういうことだと思ってやっていると、私たち自身のモチベーションも上がるし、これを地域の方が聞いてくださったら、ものすごく嬉しいのではないかという言葉がたくさん出てきます。地域の中で活動していく時に心がけていることで、もう 20 数年やっている NPO ですけれども、最初の時からやはり地域とどう関わっていくかというのが、1 番大きなテーマでした。私は地元上越市の出身ですけれども、私以外のほとんどのスタッフは県外出身です。私たちのと

ころも最初は「何しに来たんだ？」から始まり「やれるものならやってみろ」、「やりたければやればどうぞ」となり、そのうち「ああ、何かやっているね」となっていました。うちの地域の良かったところは、やっていることを認めてもらうまではまだまだかもしれないですけど、やってもいいよっていう許可が出る段階まで行けました。何年目かっていうのは、今は思い出せないですけど、そのような段階を踏んで地域の人と一緒にやってもいいかなぐらいのところになってくると、この里山 commons の緩やかなところが出てくるかな。私たちがやりたいというよりは、地域の方が何をやりたいのか、から始まり、それを私たちはどういう風に、支えるというよりは、私たちも一緒にやらせてもらいなगरだと私たちも嬉しいし、地域の方も「おっ」てなって、どんどん繋がっていくことが非常に嬉しいです。それが私たちのやり方だったのですが、地域の方々ってそれに気づいていなくて、私たちは「皆さますごいですね」と言うのですが、「いやいや」と言って…。なんて言うのですかね、自分たちの価値に気づいていないか、私たちはもうその皆さんが価値に気づいただけで私たちの人材育成の役割は終わりです、といつも言っているのです。新たな人を育てるというよりは、皆さんが自分たちの価値に気づくのが一番の人材育成だと私は思っているんです。この里山 commons の話は、地域資源を共有するという許しをもらって私たちも活動できている、というところから新たな活動も生まれてくるのじゃないかなと考えています。

大武：渡邊さん、ありがとうございました。

そうですね、新潟のかみえちご山里ファン倶楽部が活動している上越の中山間地は、私も何回か行っていますけれど、本当に雪深い地域で、棚田が残っている集落もあり、非常に美しいところにあります。でも一方で、渡邊さんがおっしゃったように、ある意味閉鎖的な部分もあるかと思うのですが、やっぱりそういったところでずっと活動されてく中で、先ほどおっしゃっていた地元の人たちが自分たちの価値とか、やっていることの意味に気づくことはすごい大きなことだし、それはまさに外部との交流があるからですね。その里山コモンズ自然学校が今、ろうきん森の学校の各地区の共通テーマでできそうだと、なんか腑に落ちたっていう話が出ています。次に、山川さんに投げかけなのだけれども、自己紹介で森の学校に育てられたとありました。その経験も踏まえて、取り組んでいる「さがみこファーム」のソーラーシェアリング事業のことも絡めて、里山コモンズ自然学校的な観点で、さがみこファームの取り組みや、「まもる・まなぶ・つかう」という観点で、重なっているところがたくさんあると思うのです。そこになぞらえてお話しいただけますか。

山川：はい、ばっちり重なっていると思います。この写真、ブルーベリーですけどもブルーベリー農園をやっています。ホールアースを辞めて、ろうきん森の学校の活動を離れてから、大体10年ぐらい経ちます。その間、太陽光発電の仕事をやりまして、今もやっているのです。屋上の太陽光発電から入って、今はソーラーシェアリングといって、農地で太陽光発電事業をやっています。その際、農

業法人を立ち上げて農業もやることに結果的になったという感じなのです。この3月に認定農業者というのを取ったので、名実ともに農業者になったっていうことで発電事業と農業の2つをやっています。ただ世の中の的にはエネルギーの問題も、農業問題も非常に大きな問題ではあるのです。けれども、このソーラーシェアリングっていう風に言われているのがですね、ある種ミスリードされて、逆に地域とトラブルを生んでしまっているケースっていうのが結構あります。つまり事業者が太陽光発電をやりたいがために農地を悪用する。でも農業は真面目にやらないっていうケースが全国で多発しています。そうすると逆に、マイナスになっちゃうのですね。ですからそういったことがある中で、まさにこの里山コモンズ的な考えがすごく大事なんじゃないかなという風に今改めて思った次第です。では、これからさがみこファームの事業紹介をさせていただきます。

【さがみこファームの事業紹介】

山川：私は、この後話される宮垣さんの後輩で、慶應義塾大学のSFCの卒業です。ろうきん森の学校をやっている時に社会人入学しているのですけれども、ちょうど論文をろうきん森の学校をテーマに書かせてもらったのですよ。それで論文を書いている最中、あの東日本大震災が起きて緊急支援の活動に行かせてもらったことが、エネルギー事業に関わる直接的なきっかけです。今、2つ会社やっていて、いずれも社員10人以下ぐらいの小規模でやっているのですけれども、食とエネルギーで自然と調和した地域の未来を作るっていうのが共

通のコーポレートミッションです。こういう形で相模原市という、神奈川県で3番目の政令指定都市ですけれども、山間部で元々郡部だったところを広域合併して現在の相模原市になりました。山間部でこんなところにうちの農園があります。今日初めて聞いた方がいらっしゃるかもしれないですけれども、電気と農作物のある種二毛作です。同じ農地を立体的に上と下で活用することで、発電も農業も両方やるってことなのです。これをやることで農業の持続性が向上する。農業だけでやっているとなかなかいかないようなところに発電事業の収入が入ることで、結果的に農業の持続性が高まる。これがソーラーシェアリングの大義です。私たちはそこに体験的な要素を加えて、これがまさにろうきん森の学校のようなことをやっています。

さがみこベリーガーデンという名前で、ブルーベリーは6月から8月の夏が収穫時期なので、いろんな人がここに来て体験的に学ぶことができるような感じです。36種類ブルーベリーを育てていまして、こんなでっかいやつもあるんです。これ僕の手なので巨峰ぐらいです。これブルーベリーなのですよ。びっくりしますよね。こんなやつがいっぱいあります。ホールアース自然学校のメンバーも前に来ていただいて、たくさん食べてもらいました。蜂蜜は授粉用に養蜂もやっていまして、去年は3000kgぐらい採れるので結構たくさんあります。こんなことで地域共生型ソーラーシェアリングというように、そういうことを言っているのです。まさに地域内外が一体となったような事業展開を心がけています。

農業地域エネルギーの課題解決を目指すということで、これはあのろうきんさん、労働組合さんと非常に関わりが深いと思うのですけれども、これは生協さんですね。生活クラブという生協さんと共同で事業をやっています。

そもそものきっかけは東日本大震災で、コンセントの向こう側っていうのを強烈に意識したのがこの事業をやるきっかけです。当時、私には息子が2人いて、こんな感じで小学校に上がる前だったのです。上が今度、大学生なので大きくなりましたけれども。やっぱり子どもたちに安心・安全な未来を残さないといけないということで、何が必要かと考えた時、やはり水と食、エネルギーこれだろうと思ったのです。こういったものを1つ1つ自分たちの手に取り戻していかないといけないじゃないかと。地元が多摩なので、有志でビジネスを立ち上げました。ちょっとこう山の方なのです、相模原市は橋本駅というとターミナル駅があり、そこから30分ぐらい山の方に入ったところ。都市に近い田舎という感じです。近くに小中学校がありまして、その奥の集落の小中学校4校が5年前に合併して1校の公立の小中一貫学校になったのです。ここの生徒数は1学年7人ですので、もう過疎ですよ。相模原市は神奈川県3番目の都市ですけれどもこんな状態です。農地ですけれども、こんな状態から開拓したということです。社会課題というのは見ればすごく難しいこといっぱいあるわけです。ただ私たちのアプローチとしては、こういったものに関してなるべくポジティブに取り組みたいということ

で、まずはソーラーシェアリングで太陽光発電の売電収益を確保しますと。そうすると割と不安定な農業収入を安定的に補うことができ、農業だけでもやっぱり自立していく必要があるだろうってということで、色々栽培方法を工夫したり、観光とか教育とか、このあたりがろうきん森の学校的ですね。いろいろ掛け合わせながら関係人口を増やしていった地域に貢献するという、そんなアプローチです。ですから電気と農作物の生産活動というのはしているんですけども、それを軸に置きつつ、たくさんの人に関わってもらって気づきのきっかけを与える。それが地域に新たな仕事を作ることにも繋がりますし、エネルギーのインフラ維持にも繋がって いくだろうということです。

いろんな人たちが、いろんな形で仕事として関わる——そんな受け皿を作っています。例えば、子育て中のお母さんたちが、幼稚園に子どもを送ったあとに「ちょっとだけ働きたい。でもフルタイムは難しい」という状況があります。そんな方たちに、ブルーベリーの選別や出荷の仕事を担ってもらっています。また、この地域は獣害などの被害も深刻で、ある種の社会課題の最前線にしていると感じています。まさに「里山」は、人と自然の境界部分。だからこそ、ここは生きた学びの場になると実感しています。ありのままの姿を見せ、そこに人が関わっていく——それが私たちの「森の学校」での実践と通じています。こうした体験を通じて、気づきや行動の変化が生まれると信じています。

現在では、小学生から企業研修まで、年間で 50 団体ほどが訪れてくれています。太陽光発電ならではの取り組みとしては、地域防災との連携もあります。たとえば、地域で全停電が起きた際には、私たちの発電所を使って電力を無償で供給する仕組みを作っています。これは、地元自治会と協定を結び、バッテリーを自治会が所有することで実現しています。こうした取り組みを通して、私たちの存在が地域にとって「来てよかった」と思ってもらえるようなものになることを目指しています。教育、観光、スポーツなど、さまざまな切り口で地域との関わりを広げているところです。最初の頃はなかなか評価されなかったのですが、次第にさまざまな評価をいただけるようになりました。太陽光発電業界でも、JP（太陽光発電協会）などを通じて、地域共生の重要性が認識されるようになり、私たちのような取り組みに注目が集まってきました。現在は、「地域循環」をキーワードに、地域内外の人・物・電気・思いをつなげる取り組みを進めています。たとえば、電気を購入してくれる企業に対しては、農作物の購入や、福利厚生としての施設利用など、多面的な関係性を築いています。こうして、街と田舎をつなぐ新しい循環の形を作っています。



今、新たに 5 ヘクタールほどの農地を活用して、「食とエネルギーのテーマパーク」という構想を進めてい

ます。すでに1.4ヘクタールは管理していますが、周辺の農地もほとんど放棄されているため、一体的に管理し直そうという計画です。そこを生産・交流・教育の拠点とし、より多くの人が関われる場所にしていきます。これは、生活クラブとの共同プロジェクトでもあり、一緒に合弁会社を設立して取り組んでいます。ただし、生活クラブに限らず、もっと多くの方々に関わってもらいたいと考えています。ここで学んだことを自分の地域に持ち帰り、例えばソーラーシェアリングを始める——そんな連鎖が広がる拠点になることを願っています。現在はブルーベリーを中心に、ブドウ、イチジク、レモンといった果樹も育て始めています。まさに、こうした動きがスタートしたばかりの段階です。

私自身、ホールアースを辞めた時は、自然学校のような活動にはもう関わらないと思っていました。そのくらいの覚悟で一度離れたのですが、がむしゃらにエネルギー事業を続けてきた中で、奇しくもこういうソーラーシェアリングをやることで、また自然とこの方向に戻ってきた気がします。ですので、まさに里山コモンズ的な活動というのを、ちょっと隣接したテーマでやっているという風に思います。

大武：山川さんありがとうございました。改めて、山川さんの事業紹介を聞いて、本人もおっしゃっていましたが、ぐるっと回ってまた自然学校へ戻ってきたと。それが今度は「里山コモンズ」的な形で、ここに神奈川県・相模原でも事業として展開されているのだなと、とても嬉しく思いました。今までずっと、里山コモンズ

自然学校、そして山川さんの発表を聞いてきたのですが、ここで宮垣先生にコメントをいただけたらと思います。先ほどの古本さんの発表の中で、「里山コモンズ自然学校」という新しい取り組みの中で、従来の閉鎖的なものとは異なる「開放性」「多様性」「緩やかさ」というキーワードが出てきて、なるほどと思ったのですが、実際に地域の中でそれを行おうとすると、さまざまな圧力や抵抗があると思うのです。NPOとして市民活動を見てこられたご経験の中で、「開放性」「多様性」「緩やかさ」といったものが大切だとわかっていながらも、現実には難しい課題に直面している。その突破の鍵や、NPOの活動の中でうまくいっている事例があればご紹介いただきたいです。また、「里山コモンズ自然学校」についての率直なご感想やコメントもお願いできればと思います。

宮垣：お二方のお話をほぼ初見で伺ったので、まず率直な感想から申し上げると、「どっちにも行ってみたい！」と思いました。そう感じた方は多いのではないのでしょうか。素敵な空間と取り組みに、自分も身を置いてみたいと思わせてくれるような活動だったと感じます。

山川さんの話は、株式会社という形態でありながらも、極めてNPO的というか、社会課題に向き合っているという点で、非常に共感しました。しかも、「里山こそ社会課題の最前線」と聞いて、なるほど確かにそうだなと思いました。そこに関わることで見えてきた課題や資源、関係性が、事業の展開につながっている。名前としては「ファーム」だけれど、ほぼ何屋さんかわからないというのがむしろ素晴ら

しくて、いろんな角度から、いろんな顔を持っている存在。今の社会にとって非常に必要なイノベーティブな存在であり、ヒントになる動き方をされていると感じました。

「コモンズ」という言葉についてですが、これは単に場所やある種の状態を指しているわけではなく、すごく動的で、変化し続ける、共有地化するプロセス全体を指しているのではないかと思います。つまり、「これがコモンズです」と固定されたものではなく、常に再定義され続けるもの。これによって、言葉の古いイメージから脱却できるのではと思います。「コモンズ」という言葉を使うと、「何を共有するのか」「誰が共有するのか」「どうやって共有するのか」といった点が気になりますよね。おそらくこのコモンズという考え方は、多くの自然学校で共有できる考え方だけれど、誰が共有するかは地域や活動によって異なる。そして、どうやって共有するかということも、それぞれの個性によって違ってくる。また、「何を共有するか」についても、空間や森といった物理的なものを思い浮かべがちですが、実際に皆さんが話していたのは「活動」だったと思います。そこには人が関わっていて、何らかの経験をすること、それを含めて共有する。つまり、社会の中で生きていくうえで大切な価値が、そこにあるということが見えてくるのかなと感じました。思いつきのようなことも言ってしまいましたが、そのような感想を持ちました。

大武：宮垣先生、ありがとうございました。今のお話の中で特に印象に残ったのが「動的なプロセス」という言葉でした。自然学校や里山の取り組みも、常に変化し続けています。その一瞬

一瞬を切り取る場面もありますが、その変化し続けるプロセスをどう捉えるかという視点の大切さを改めて感じました。そして、時間ももう4時近くになってきたので、限られた時間の中での議論になりますが、「里山コモンズ自然学校とは何か」というところから始まったこの議論を、もう少しNPOという視点に移していきたいと思います。

今日の場合は「森の学校の20周年」でもあります。私自身も今回、「NPOとは何か」ということを改めて問い直す機会となりました。宮垣先生のご著書のタイトルも『NPOとは何か』でしたが、これからの里山コモンズ自然学校の未来を考える上で、我々NPOの在り方ももう一度考えていきたい。そこで、まず山崎から、改めて「NPOとは何か」「NPOはどんな役割を果たしてきたのか、果たすべきなのか」という点について触れてもらえますか。

山崎：NPOという言葉は、だいぶ世の中に広まってきましたが、理屈上、すべてが市場経済でうまく回るという前提がずっとあったわけです。でも、それだけでは解決できない課題が出てくる。環境問題や格差の問題などですね。そうした中で、「それを補うために税金を払って行政に託しましょう」というステージに移ったわけですが、行政も完璧ではないし、税金にも限界がある。だから、こぼれ落ちる部分が市民に直撃する前に、NPOがそこをサポートするという役割を担うようになってきた。ろうきん森の学校の活動を見ると、自然を調べたり、木を植えたり、切ったり、自然観察をしたり、そうした見える活動の背景には、地域の課題や困り

ごとがありました。共助、助け合い、相互扶助、共有などのキーワードが出てきたように、そういった価値を背景に、全国各地で20年間活動を続けてきた。そうした活動を、労働運動を背景とする福祉金融機関であるろうきんが支えてきた。そして、その連携先がNPOであるという点。ここに、今後の学ぶべき点や、20周年を機に整理すべきことがあるのではないかと考えています。

今日は宮垣先生にもご参加いただいていて、『NPO とは何か』という著書も出されていますので、「誰が」担うのかという観点から、中心を担ってきたNPOという存在について、ぜひ先生の視点からお話をいただければと思います。ろうきん関係者も多く参加していますので、持ち帰れる学びが色々あるのではと思います。

【宮垣先生の話】NPOの歴史と特徴

今から5分10分お時間いただいて、お話をしたいと思います。NPOとは何かという話について、一緒に考える時間になればいいのかなと思います。ご覧いただいているのは私が勤めている慶應義塾大学のキャンパスで、ひろしま自然学校さんと同じく、環境省の自然共生サイトに登録されました。

多分呼んでいただいたのは、ご紹介いただいた本『NPO とは何か』を出させていただいたことがきっかけだと思います。何でこういうタイトルで本を出さざるを得なかったのかなっていうところもお話できればと思います。要するにNPOって言葉は先ほど申し上げたように、言葉自体は知っていて、なんかみんなNPOと言えるようになってきました。私が阪神淡路大震災の時にNPOって言ったら、それはNHKと何が違うのだとか、ODAと何が違うのだとかですね。3文字のアルファベットは

何が違うのだって必ず言われました。それからすると、時代が変わったなという風に思うのです。けれども、同時に当たり前になってはいるけれども、理解としては全然当たり前になっていなくてですね、言葉は知っているけども、よくよく考えてみると何のことよくわからないという、社会状況があるのかなと思います。そういったこともあって、改めてこの問題について考えてみようというのが、この本の元々の企画意図だったわけです。

私は企画の時に「NPO とは何か」というタイトルにしてくださいと編集から言われたのですが、頑として断って、「そんなことは答えられるわけがないから無理です」とずっと言い続けたのです。「いや、とにかくこのタイトルで」ということで、こうなったということなのです。でも振り返ってみると、全編を通して「NPO とは何だろうか」ということを、いろんな角度から考えてみることができました。先に申し上げると、別にここに答えが書いているわけでは全くないのですが、でもいろんな角度から見ることによって、私たちがなんかすごく距離感があるなと思ったNPOが、実は非常に身近な存在で、社会にとっても不可欠な存在だということは、少しでも伝わればいいなと思って書いた本です。

先ほど申し上げたように、そのNPOを取り巻く状況というのは、NPOに関わる人間からすると今更そんなこと問われる必要ないよと思うぐらい当たり前ののですが、さっき感想で「何かいかがしい存在じゃないか」ということがありましたけど、それは冗談ではなくて本当にそういう風に思う人はいっぱいいるわけです。UFOと一緒に、得体が分らないと怖いって思うのですよね。大体そういうものですよ。だからその得体が分らないから怖いって風にして、怖いから何か怪しい

とか思いがちなので、それは多分、実態が理解されていないからそういうことが起きているのかなという風に思います。

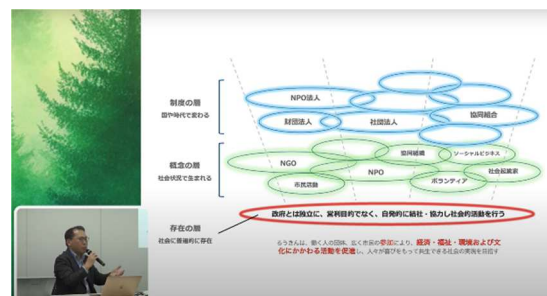
とはいえ、NPO 法人だけで今、5 万弱ぐらいあります。もう少し広げて公益社団・公益財団で大体 1 万ぐらいです。一般社団・一般財団法人で 10 万ぐらいです。本にも書きましたけど、コンビニの店舗数が大体 5 万数千ぐらいですからそういうこと考えると、本当は身近に実は存在しているけど、気づいてないか見えていないか、そういう状況なのだと思います。それだけ当たり前になっているのだけでも、先ほど申し上げたようにちょっとよくわからないなということがあ一方、ろうきんさんがまさにそうなのですけども、一緒に何かをやろうっていう実態も、ニーズもそれから多分長い目で見るとこれはどんどん高まっていく方向にあるのだろうと。

NPO とは何ぞや、の話をする前にいろんな言葉が並べて申し訳ないのですが、NPO の仲間たちという言い方がいいでしょうか。NPO という言葉に付随するかどうか、NPO 的なものと言うのでしょうか。そういうものをざっと海外で用られている概念もそうですし、日本で用いられている概念もそうですし、色々あげてみました。NPO という言葉もあれば、NPO 法人というものもあるし、認定 NPO 法人というものもあるよねと。違いはよくわからないなということもあるかも分かりませんが、ヨーロッパなんかに行くと非営利と共同組合は非常に近い距離感にありますから、ヨーロッパに行くと非営利・協同セクターみたいな捉え方をします。すると共同組合は仲間か、みたいな感じになってきます。最近で言うと、労働者共同組合っていうのが法人格を得られるようになりましたし、それから考えたらソーシャルビジネスって言葉もあるねとか。非営利セクターという言い方もあるねとか、いろんな言葉遣いで語られ

てきてこれを 1 個 1 個定義していくことは、学問的にはとても大事かもしれないんだけど、多分それをやっても逆に理解が複雑になってしまいます。例えばこういう風に理解したらどうですか、というのがこのスライドです。

簡単に 3 つに分けていますが、本当はもう少し複雑なのだろうと思います。要するに社会にそもそも存在しているものは、おそらく社会っていうものが立ち起こってきた時からあったかもしれない。それは何かと言うと、政府とは独立した存在であって、政府が作ったわけじゃなくて、でもなんかこれで儲けなきゃいけないという存在でもなく、だけでも必要だね、あるいはやりたいね、というところで人が集まってできたものです。

自分のためだけでなく、誰かの利益



にもなるような活動っていうのは有史以来、多分ずっとあるのだろうと思います。逆にいうと、この活動がなければ社会は成り立たなかったはずだと思うのです。その上にいろんな形態の活動が出てくるので、それを NPO と言ってみたり、ボランティアと言ってみたり、ソーシャルビジネスと言ってみたり。時代時代、あるいは国によって言葉の入れ替わりみたいなことがあったのだろうと思います。それが概念の層と書いているものです。それが実態化していき、これはとても大事だから社会的にそれを支えられるような仕組みを作りましようとなってきました。じゃあ NPO という存在がこれから必要だから、NPO 法なるものを作っていきましようか。あるいは

NPO 法ってということだけではうまく法人格として全部掬いきれないので、一般社団法人という法人格を作りたいとか、いろんな形で制度化されてきました。

国によって当然変わると思います。書いているのは日本の状況の話です。大事なことはあの繰り返しますけど、上を見るのではなくて、この下の赤いところの話です。こうやって捉えると、例えばろうきんさんは、私も今回ご縁をいただいて勉強させていただいたのですが、そもそも「働く人の団体で、広く市民の参加によって経済・福祉・環境・文化に関わる活動を促進し、人々が喜びを持って共生できる社会の実現を目指す」ということですから、まさにこのことを言っているの、ということはその広い目で見ると NPO とうきんはある意味において、非常に共通性を持っている。同じセクターという言葉はちょっと誤解があるかも知れませんが、同じセクターの中にいる仲間であるという位置づけで十分可能だろうというのがここでの整理です。

NPO が普遍的かという話の例によく学生に出して、「あ、そうかっ」と言われるのは、皆さん Wikipedia 使いますよね。Wikipedia ってどうやって成立するかっていうと、記事書いている人はみんなお金もらっているわけじゃないですよね。ボランティアの人たちが一生懸命書いていて、誰かがさらにそれを上書きしてできている、壮大な知識ベースです。運営しているのは、米国内国歳入法 501 条(c)(3)認定を受けた慈善団体である、Wikipedia 財団ですからもう立派な非営利組織です。言ってみれば NPO なわけであって、あるいはオープン AI なんかも元々 NPO として立ち上がりましたので、我々の社会、少なくとも現代社会において NPO の存在がなければ、結構不便なことがもう既に起きているのだ

ということも、補足的に知っておいていただくといいのかなと思います。

とはいえ、やっぱり分かりづらい存在で、なんで分かりづらいのかという話なんですけど、NPO の N は「Non」ですよ。ね。「Non-Profit Organization」ですよ。ね。NGO と言ったとしても「Non-Governmental Organization」で、Non から入ります。日本語で言うと「非ず」ですよ。ね。僕らの業界ではこれを「ノンの悲劇」ってよく言うのですが、なぜ悲劇かというと、その非ずから定義される言葉って難しいと思いませんか。大体こう「非」だから、それ以外のもの全部入っちゃうわけですよ。だから一生懸命枠組を作って説明をしようとしても、例外がどんどんできていく。存在を何とか定義しようとしているという、非常に存在と定義のなんか矛盾みたいなものが、そもそも含まれている存在なわけです。だからいけないってわけじゃなくて、だから面白いのだと私は思うのですけれども。その非ずという存在の難しさ、もう少し言えるならば、その枠組を逸脱していく存在、ある定義をしてもそこに含まれていかない部分が必ず出てきてしまう。あるいは越境していく、ということが出てきてしまう。先ほど山川さんの話で NPO 的だと私が申し上げたのは、さがみこファームというところで活動しているのだけでも、どんどん自分たちの定義を塗り換えていくような展開をしていらっしゃる。この意味では、とっても公的な存在なのだろうという風に思うのですよね。

漢字いっぱい書いていますけれども、僕らが知っている企業観と言うのですかね、組織観って言うんでしょうか、もしかするとうまく当てはまらないかもしれないし、制度観にもうまく当てはまらないかもしれない。でも、実際に存在しているわけなのでそれはもしかすると、我々が持っている定

義のほうを少し疑った方がいいのかもしれない。ということが1つ目です。

それから一方で、もう1つの悲劇性なのですけども、非ずって言っていることで、しかも非営利と言葉がついているので、無償とか無報酬とか、そのイメージをどうしても持ってしまうのです。そうするとそういった団体にお金の話をすると、突然すごいギャップから来る、いかがわしさになってしまうのだけれども、それはそもそも誤解だという話が大事です。非政府組織もそうで、昔は「非政府組織です」というと「反政府組織ですか」って冗談抜きで言われていた時代もあり、学生なんかそういう反応されていたのですが、いや非政府というのはと反政府というのは違うのだよ、と。もしかすると、時の政府に親和的な活動もあるかもしれないし、そうじゃない活動もあるかもしれない。

大事なことは、政府がコントロールしているのとは違う立場で、独立して活動していることなのだよという話をよくします。それから、既存の組織観とか制度観と当てはまらないということと言うと3番目ですけれども、これは企業との対比でイメージしていただくと良いと思うのです。そもそもNPOって存在は「非ず」でありながら、同時にすごく強烈的な価値観とか社会観とか、そういったものにコミットする組織ですよ。自然学校もそうですし、福祉の活動もそうですし、子育てもそうですけれども、「こうあるべきだ」「こうしましょう」というところで活動が起こっていますので、そういう意味では無色透明な存在じゃないのです。

一般的に、特に大きくなればなるほど、なるべくそういう特定の価値観とか特定の考え方とは距離を置いて、なるべく無色透明でありたい存在になるのだと思うのですけれども、NPOって存在はそれとは違って、逆に中立的な存在をやめた組織だって

いうことがポイントなのかなという風に思っています。補足的に、「良いNPO、悪いNPO」っていうふうに書きましたけど、NPOがいかがわしい、もしそういうイメージがあるとするならば、それはNPO全体がいかがわしいわけじゃなくて、いかがわしいNPOもあるかもしれません。でもそれはいかがわしい企業があるのと全く同じことであって、あるいは尊敬されないような国や政府があるのと同じことであって、良い組織・悪い組織があるのと全く同じことです。だから、尊敬されるNPOもあれば、そうじゃないNPOも当然出てくるのだという捉え方をするのが、おそらくフェアな捉え方なのだろうと思います。

ちょっと駆け足でお話をしましたけど、山崎さんの問いにちゃんとリプライできていますかね？

山崎：この辺の整理がよくわからぬまま「NPOとの連携」って話が進むと、なかなか混乱が生じるかなと思ったので、ありがとうございます。

大武：NPOの当事者である我々も、非常にうなずくこともあるし、「やっぱりな」とか、「そこはまだ課題だな」という、非常に共感というか同意することがたくさんありました。今、宮垣先生の「改めてNPOとは」という話を受けて、実際に現場でNPOの当事者として関わっている渡邊さん。今のお話で「そうそう」と共感や、「でもそこはちょっと違うかも」って思ったのでは。いかがでしょうか？

渡邊：普段、NPOではあるのですが、NPOだということをあまり意識せず活動をしておりまして、「ああ、そういうことなのか」と。ろうきんさんとの繋がりがみたいな共通したコン

セプトがあるというところも、すごく嬉しいなと思いながら話を聞いておりました。宮垣先生がおっしゃっていたところの、「価値や信念を強く含んでいる」というのは、本当にNPOの大事なところだと思います。それでありながら、今まで信念は持ちながらも、なんか存在は中立でありたい、みたいなところがあって、「1人の村人になるな」って昔よく言われたのです。高齢化が進み田畑が荒れていて、何とかしたいという課題に対して、「じゃあ、私が助けに行きます」というのは、村人が1人増えただけで何の解決にもなっていない。でも、私たちNPOだったら、1人の村人にならず、中立的な存在として、その課題に対して「1人じゃない何を作るか」。例えば皆さんにお手伝いいただいたのと同じように、私たちは間をとって繋げる役割で、どなたかとどなたかを結びつけるとか、私たちが活動をコーディネートしながら一緒にやっていただくとか。そしてそれが継続していくためには、今度どうしていこうか、というような組織づくりまでとか。そういうことを繋げていくのがNPOの役割かなと思っています。やはり私たち、先ほども言いましたけど、村で活動が続けていく中で、いろんな課題が出てくる。どうしても入り込みたくなる、感情移入もあったりとかする中で、スタッフは特にそうなのですが、それに共感して、やっぱりいろんな仲間たちや協力してくださる方が集まる。そういう人たちを上手に、「やりたい人がやりたいことを、強制ではなく、うまく繋げていく」。先ほど山崎さんも言っていたけど、「コーディネート能力」。それを上手にやっていけるようになる

と、私たちもいいかなと思いながら、今、お話を聞いていました。

大武：今コーディネート力っていう話を出していただきました。山崎にまた振ろうと思うのですが、一方でろうきん森の学校が2005年に始まった時、「企業とNPOによる協働事業」とか「CSR」という文脈でのスタートだったのです。それから20年経ってきている中で、山川さんのように株式会社という法人形態ではあるけれども、極めて森の学校に近いような活動も実際されています。じゃあ我々NPOって一体何なのだろうとか、どういう立ち位置であるべきなのだろうってところが、多分皆さん中にもこうグルグルこう出てきていると思うのですが、やっぱりNPO側の全体的な問題って、そういったところにやっぱりあるのですかね？

山崎：今日私自身は、ホールアース自然学校の代表としてここにいますけれども、名刺をもう1つ持っていて、「日本NPOセンター」の副代表理事にもなっています。NPOっていうところに身を置いている人たちが、痛烈に感じているのは、大武が申し上げた通りなのです。しかしながら、昔はぐいぐい経済を進めていく株式会社のオルタナティブとして、そこからこぼれ落ちるものを拾う存在がNPOということで、非常に分かりやすかったのです。連携をする意義もそこにあったのです。ところが、だんだん世の中は課題がもう山積みになってきてしまっていて、企業は金だけ儲けてればいいってことはどの企業も言わなくなって、やっぱりサステナブルとか持続可能性、

ネイチャーポジティブっていうことを経営理念のかなり上の方に置くようになってきました。そういう意味においてはその昔 NPO が言っていたことにぐっと近づいてきた。逆に NPO はボランティアで、地域主義で、フットワーク軽いってところで、どうしてもお金的な持続可能性が立ち行かないので、企業のやり方を真似てきたのです。

企業が NPO 化し、だんだん NPO が企業化してきているっていうのも一方であるのですね。そうすると企業は NPO 化して NPO は企業化しているので、結局同じようなセクターになりつつある。これをいいと見るか悪いと見るかというのは、多分いろんな分析があると思うのですけれども、いずれにしても世の中は今、そういう形になってきているのじゃないかなと思っています。では、互いに歩み寄ってきたのであれば、なおのこと協働して化学反応を生んで、より良い社会にどんどん近づけていかないと、やっぱり地球の悪くなっていくスピード感に追いつかないのじゃないかということです。今一番のテーマになっているのは、NPO から見たら歩み寄ってきた企業とどううまくここで協働していくかという、要は飲み込まれずに上手に協働して行って、社会課題解決のスピードをスパイラルアップしていくのがものすごく大事なのです。そういうタイミングなのかなという気がしています。もう 1 個、これは宮垣先生の本にも書いてあるのですが、とはいえこぼれ落ちる社会課題っていうのが出てくる。ここを拾う NPO でありたいっていう、そこのマインドとしては、企業と共にあるっていうだけじゃなくて、誰かが拾わなきゃいけないでしょ。その NPO であるっていうところ

も、やっぱここも考えなきゃいけないのかなっていう感じでしょうか。

宮垣：今、補足していただいたのはその通りだと私も思っていて、ちょっと大げさな言い方で「最後の砦」だって言い方をよくするのですが、その誰もが本当は必要なんだけど、収益っていうことからするとやっぱりできないし、政府は公平性が税金を使ってありますから、全てのものにどうしても対峙できないし、対応できないってことがあります。そうするとどうしてもいろんなところでこぼれ落ちると言うのでしょうか、誰も見てもらえないような課題というのはあるし、それが増大していくのが現代社会だと思います。

そういう意味では、誰が見るのかと考えた時に、やっぱりそれ必要だよねという風に声をあげる存在がいけない。課題は課題として存在していなくて、これは課題ですよって言って初めて顕在化するのです。NPO 活動の 1 つの大事な点は、その課題解決ってこともあるのですが、まずここに課題があります、あるいはここに問題がありますって、いうことを行動することによって世に知らしめるという意味ではとっても大事なのだらうなと思います。

2 つ目はその前段の話なのですが、私はよく最近「クロスセクター」という言い方をしています。あまりセクターと言ってこう線を引くのもそういう時代でもないのだらうなとは思いますが、とはいえ NPO と何かの協働とか、企業と何かの協働とかっていう言葉が巷に溢れているので、そうであればクロスセクターで行きましょうという言い方をします。この時のクロスセクターっていうのは、一般的には社

会課題があって、その社会課題に向き合って解決するために NPO の得意技、企業が持っている得意技、あるいは行政ができること、というような形の組み合わせでもって解決しましょうという話で、それは王道だと私は思うのです。けれども、クロスセクターのあり方でもっと多様だと私は思っていて、課題解決だけじゃなくて人の交流だってクロスセクターだと思いますし、あるいは何らかの商品開発みたいなことだってもしかしたらできるかも分かりません。

NPO の現場は、イノベーションの芽が山ほどあるわけであって、でもそれは NPO として別にそれを商品化しようと思っているわけじゃない、サービス化しようと思っているわけじゃない方も多いかもしれないのです。けれども、そこがもしかすると企業が入ることのできるかもしれない。そうすると経営戦略的なところにも関わっていくかも分かりませんよね。それから NPO の優れた利点は、掛け持ち可能だってことだと思うのですよ。最近企業の副業のあり方がだいぶ変わってきていると思うので、複数の名刺を持つということが少しずつ増えてきたかなという風に思うのです。特に企業とか会社勤めの方が一緒に同じ人生の中で NPO 活動に関わるってことはできるわけであって、企業は定年があるのだけれども NPO は原則的に定年をあまり考えないと思うのですよね。そういう意味では長い人生を考えた時に、企業人でありながら会社員でありながら同時に NPO に関わっているってことが、いかにその人の人生にとってあるいは家族にとって、大きな意味をもたらすのかと考えると、クロスセクターのあり方っていうのはいろんな接続の仕方があるのだ、これはまだまだ工夫

のしがいがあっていくらかでも提案していける世界かなと、私は思いました。

大武：クロスセクターっていう言葉をいただきましたけど、そういう意味ではもしかしたら株式会社とか NPO 法人とか、一般社団法人とか、あんまり特定の法律とか制度に紐づいた枠に僕ら自身が囚われすぎているのかもしれないと話聞いて思いました。山川さんにコメントいただければと思うのですが、さがみこファームで地域の課題解決に取り組んでいる中で、株式会社という形態でチャレンジされているけども、NPO とか意識はしてないのかもしれないけれども、森の学校で取り組んでいるような里山での課題解決に今チャレンジしていく中で、組織とか法人のあり方についてどう考えていますか。山川さんにとって NPO 的っていうのはどういうスタンスなのでしょう。

山川：どうですかね、NPO 的かどうかっていうのはちょっと分からないのですが、個人としてはそんなに法人格っていうのは意識してないですね。ただその法人格ができていてっていうのは、それなりにやっぱり理由があるので。それぞれの必要性に応じて法人格ができてきている。それで会社法が改正になってまた新しい法人格 ができるというのは、時代によって変わってくるものだと思うのですよ。ですから、箱をどう使うのかっていうだけの話であって、その人のスタンスにバチッと合うものがあればそれでいい。けれども、完全に合わなくてもなんとなくその大まかに合っていれば、こっちにしとこうかな、というぐらいの感じ

で、実際自分は株式会社を選んでいきます。例えば発電の会社っていうのは、これは明白でアセット（資産）を持つということなので、これはNPOではなかなか難しいことなので、株式会社にしました。農業で言えば、もちろんNPOで農業そのものはできるのかもしれないですけども、ちょっと機動的に動きたかったっていうのもあって株式会社でやっている中で例えば、いわゆる体験的なことやっている上ではそんなに不自由は感じてないです。ちょっと特異かもしれないのですが、ご寄付をいただくことがあるのです。これはお付き合いしている会計士さんから言われたのですが、「株式会社としては極めて珍しいね。むしろ寄付をする方じゃないのですか。」と。そういう寄付をしたくなる存在であるのかもしれないですけど。結果的にそういったご寄付をいただくことっていうのはありますね。そういう意味では、認定NPO法人にしたら税制優遇が受けられるとか、そういう制度的なメリットがNPOの方があります。NPO業界にいたら

「NPOとは」というのはすごく考えるのでしょけれど、語弊があるかもしれませんが、今はどっちでもいいよ、という感じでしょうか。

法人格云々というより、例えばろうきん森の学校って、まさに地域に根差した活動じゃないですか。地域と付き合っていく上で、組織の規模は意外と大きななと思っているのです。ろうきんさんは、直接支援することが難しいからNPOと協働して始めたのですが、仮に直接支援ができたとして、そのまま企業が直接地域に関わってこの活動ができたかどうか。こういうことを考えてみて欲しいのです。そうした

時にむしろ地域で小さな組織が機動的に動く、地域と関係を築いていく方がうまくいくかもしれないなど。ただし、人やお金とかは大きなところと組むことで活動が拡大することっていうのはあるので、じゃあそれを規模の大小や、地域にどれだけ関わるのか、その辺りに結構、得手・不得手があり、うまくいくことと・いけないことがあるのだろうなと思います。法人格よりそうした要因のほうが大事な気がしますね。

大武：そうですね。今、本当に地域にどっぷりという意味で渡邊さんに、適正規模感とか地域から企業がどういう風に見られているか、という経験があればお話してください。

渡邊：多分、おっしゃる通りだと思います。いきなりパツと入ってきても、企業がやりたいって入ったとしても、どちらもお互いをうまく話せないところがあると思うのです。しかし、私たちの1番大事な役割が、その間を取り持つところだと思っているのです。私たちも、最初は自分たちが地域に入るのに苦労した経験があります。私たちもやっと村の方と話ができるようになり、そして私たちが紹介してくれるのだったら一緒にやってもいいよ、って言ってもらえる関係性を少し作ることができたと思っています。ろうきん森の学校の活動に際しても、くわどり市民の森というところで最初始めたのですが、そこは上越市の持ち山なので土地自体は地域の方は絡んでないのですけれども、そこでろうきんさんが森の学校をしますって言った時、じゃあここで私たちも一緒にやろうって、地域の方が協力してく

ださったという経緯がありました。私たちと一緒にやりましょうって言って賛同してくださる方は、ろうきんさんの信頼感もあってすごく入りやすかったのじゃないかなと感じています。

大武：話を聞いてホールアース自然学校のことを思い出しました。ホールアース自然学校はこれの中では比較的な規模の大きなNPOにはなっているのですが、まだまだ他の企業さんから見たら小さな存在です。結構やっぱりその地域とか特に学校なのですけども、学校って特定の企業に関わりたい・協力したいっていうと、「いやいや」と言って、どうしても壁があると思うのです。しかし、我々NPOが間に入ると「じゃあ、ホールアース自然学校が間に入ってくれるなら」という形で、学校への支援を企業と一緒にやるっていうことは、あったりするのですよね。そういう意味では、山川さんが言ってくれたみたいに、NPOの存在は地域と外との窓口という役割なのだと、改めて思いました。

時間が予定時間を過ぎてしまっているのですが、ここで何か結論じみたことが出せるとは元々思いません。しかし、最後に改めて「里山コモンズ自然学校としてのろうきん森の学校の意義」という大上段なテーマを掲げてはいるのですが、私の中では宮垣先生おっしゃっていた「クロスセクター」が印象に残りました。自分たちはこうだからという定義付けはもちろん大事だし、自分たちのアイデンティティは大事だなと思いつつも、でもそれに固執してはなかなかこう繋がる、繋げることもできないというジ

レンマというか、課題を改めて思いました。

最後に皆さんから、里山コモンズ自然学校として2025年度から引き続き続けていくということなのですが、ここを大事にしたいとか、気をつけていきたいっていうことを、この場の感想も含めていただきたいと思います。まず、森の学校を卒業した山川さんお願いします。

山川：冒頭お話ししましたが、私は本当にろうきん森の学校に育てていただいたっていう感覚がすごく強いです。最初10年関わって、その後10年経ってまた呼んでいただけるということ自体、すごく嬉しいなと思いますし、これまでの20年を振り返って、この先の5年・10年をこう描いていく皆さんの活動を改めてお聞きして、いや本当に10年・20年の積み重ねなのだと改めて感じました。フィールドは違うのですが、同じような仲間としてやっていきたいって改めて思いました。ろうきん森の学校、里山コモンズに期待するとすれば、今まで培ってきたものの、例えば地域との繋がりをどう作るのかとか、あるいは、「森を育む・人を育む・森で遊ぶ」活動がありますけれども、なんかこういった暗黙知化しているものをなるべく可視化して、そうすると他の地域でこういったことがまたやりたいと言った時の助けになるのだと思うのです。各地区はきっと今までの活動をさらに突き詰めることで、その価値というのが高まっていくと思うし、全国事務局はきっとそういった6番目、7番目の森の学校の活動を広げるお手伝いをするというのではないかなと思います。私も頑張りますので、

是非頑張っていきましょう。ありがとうございました。

古本：皆さん長い間話を聞いてくださってありがとうございました。里山で地域に泥にまみれてやっている側の話とか NPO 側の話を随分長く聞いてくださったと思うのですが、私たちが今後の姿を見直す時に、里山をどう活用するかという時にでも、町に住む多くの人は、里山なんて必要としていないのではないかみたいな話、諦めみたいなのところの話がよく出るのですけども、化石燃料を使って輸入した食品に頼ってってというような生活が当たり前になっている人たちも、今回米騒動があったりしますけど、改めて自分たちのちょっと近くにある、里山みたいなところの価値を見直していただけるようにするにはどうしたらいいのだろうと、日々考えたりしています。そういう時にやはりろうきんさんや労福協さんが、そういう無関心層の方も引っ張って、繋げてくださるってところが結構大きいのではないかなと思っています。是非、普段接しない里山に接しない町の方々が広く里山に来ていただくような、目に見えるきっかけを作っていただければなど改めて思いました。ありがとうございました。

渡邊：今日のお話の中で本当にたくさん言葉が刺さってきたのですが、やっぱり新たなコモンズという言葉の中で、緩やかなとか、多様性という言葉、これからやりたいなって思っていたことに繋がっていくと感じました。1つの活動に対して、こうしてくださいとか、これをプログラムでやりますというのを作るのはとても簡単なのです。けれども、いろ

いろな方がいろいろな立場で、いろんな考えを持って、私これならできるっていうものを、それを認めて支えながら活動を進めていくっていうのが、これからやっていきたいなっていうスタイルだと私も思っています。特に棚田に関わっていて、やっぱり棚田で一生懸命労働するのを助けてくださるのは、すごくありがたいのですけれども、それがやっぱり叶わない、でも自分は写真撮ってちょっと紹介することならできるとか、もうちょっと簡単なことならできるとか、色々な関わりを提案してくださる方もいらっしゃるのですね。それも全部棚田を支えるサポーターみたいな形で組織を作っていけるなど、この25年度の計画を考えながら思っていたところに、この言葉が出てきたので、ああよかった、私たちの考えはこれにちゃんと当てはまっているし、進めていけるなどというとても自信をいただきました。今日はありがとうございました。

山崎：森の学校が立脚しているこの農山村ってというのは、そこにしかない機能を持っているのですよね。機能もたくさん持っているけれど、課題もたくさん持っている。そして都会には都会の機能があって、ただそこには課題があると。この都市部、その里山がコモンズであるならば、その里山と都市ってところが上手に総互補完的であるといいなと、今日改めて思いました。どちらがいいとか悪いという話ではなくて、それぞれに機能や役割があって、それぞれに得意不得意があって、それぞれが補いあえるようにするためには、何よりも都市も農山村も元気であるってことはすごく大事です。私たちは普

段はいわゆる里山地域で暮らしているので、ろうきん森の学校の活動も含めて、一生懸命頑張っていくと。都市も持続可能な都市とはどのようなものかを考えていただく。それぞれが苦手分野をお互い補完し合う、これが、おそらく環境省が言っている「地域循環共生圏」のことだと思うのですけれども。おそらくこうやって相互補完的に日本をどう上手に持続的にしていくかというところなのかなと思います。ろうきん森の学校の話の話を今日ずっとしてきたのですけれども、なんか見えてきたのはそういうところかなと思いました。

大武：最後に、宮垣先生。今日初めて「ろうきん森の学校」というプロジェクト概要とこのディスカッションを聞いていただきました。率直な感想と、私たちへのエールいただければと思います。

宮垣：20年ですもんね。すごいことだと思うのですよ。全然まだ見えてないので、多分取り組みがこの時間の中で収まらない、いっぱいエピソードがあったのだろうなと想像します。ろうきんと自然学校を運営するNPOと一緒にやるっていうのは、もしかしたらもっといろんな可能性があるのかなと。例えば、資金提供があります、活動に参加します、でも活動も様々あって、いろいろな関わり方がある。実は結構感銘を受けたのは、広島地区の活動報告された方が、元々私は活動参加者だったという話で、山川さんも、元は森の学校で活動されていた。参加者側になってみたり運営側になってみたり、いろいろな関わり方をするとということまで含めて考えると、一緒にやると

いうことの豊かさっていうのは、もっと考えてもいいと思うし、そこに何か可能性を感じるなと思いました。これが1番言いたかった感想で、多分これは5年また10年って節目のところで、こんな関わり方をお互いしたのですよというところの豊かさが、さっき山川さんが可視化されればとお話されましたけど、可視化されていくとすごいいいのだろうなと思います。さらに若干欲を言うと、活動されている方の声をもっと私は聞きたいなって思って、ろうきんの皆さんあるいはろうきん森の学校をきっかけに、関わってきた方がいっぱい本当はいらっしゃって。活動者全体で言うと28万人ですよ。これすごいことで、ちょっとやそっとじゃ真似できないレベルのことになっているのだと思います。その28万人が得られた価値みたいな



こと、どう活動したかじゃなくて、28万人の方々がどういう価値を得て、それが自分の人生、それぞれの活動、暮らし方・生き方にどういう風に関わっていったのか。こうした声を集めて可視化していくと、それはすごいことになるのではないのかなと、感銘を受けながら参加させていただきました。自然学校ってAIじゃ一番真似できない部分ですよ。AIじゃ一番真似できない部分をやっていくっていう意味では、もしかするとこれからの時代の最先端に位置付けられるようになるかもしれませ

ん。さっき「里山は社会課題の最先端」という言葉がありましたけど、我々が一番向き合わなきゃいけないものが里山にだいたい詰まっているのではないかという感想を持ちました。

大武：宮垣先生ありがとうございました。私も横で聞いていて、すごいビシビシ刺さるというか、本当にいろいろ取り組んでいかなきゃいけないなと思いました。最後おっしゃっていただいた可視化していくとか、もっと多様な関わり方を提案し、実践していくということが、多分この25年度からの関係者全員に課せられた課題かなと思い、エールとして受け取りました。本当にありがとうございました。本当に話は尽きないのですけれども、もう時間の限りもありますので、本当に今日はお忙しいところ宮垣先生、山川さん含め、各NPOの皆さんもありがとうございました。

「里山コモンズ自然学校としてのろうきん森の学校」というテーマでしたけれども、ここにお集まりの皆さん、そして今日ここには来られていないですけれども、今まで本当に多くの方に支えていただきました。これからもろうきん森の学校を、今ここにお集まりの皆さんと一緒に続けていきたいと思いますので、これからもご支援ももちろん、本当にありがたいのですけれども、一緒にパートナーとしてそれぞれができる関わり方で、森の学校を続けていきたいと思いますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。今日は皆さん、本当にどうもありがとうございました。

以上



 の学校

ろうきん森の学校20周年記念シンポジウム

里山コモンズ自然学校としての 『ろうきん森の学校』の意義

～企業とNPOの協働による「森・人・地域」を育てる20年間の活動の軌跡と未来～

2025年3月14日 13:30～16:30

主催：NPO法人ホールアース自然学校

共催：労働金庫連合会

協力：NPO法人いわきの森に親しむ会
 NPO法人かみえちご山里ファン倶楽部
 NPO法人グリーンウッドワーク協会
 NPO法人ひろしま自然学校

1

1



 の学校

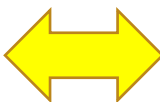
1. 開校の経緯

ろうきん森の学校＝労働金庫連合会50周年記念社会貢献活動

1) ろうきんと自然学校の特徴 ～目指す社会は同じ～



- 非営利の金融機関
- 勤労者のみならず、市民団体などのネットワークによって成立
- 経済のみならず、福祉・環境・文化に関わる活動を促進
- 人々が喜びと持って共生できる社会の実現に寄与する



共通・共感

自然学校

- 非営利の民間団体
- 子どもから大人まで幅広い層を対象
- 専門性を持った指導者、フィールド、実施できるプログラムを持つ
- 持続可能な社会の実現を目指す

2

2

1. 開校の経緯

2) なぜ「ろうきん」が森の学校に取り組むのか？

**CSR
(企業の社会的責任)**

1. コンプライアンス(法令を順守する)
2. 自社事業を通じた社会的課題の解決
3. 社会共存していくため、一歩踏み出した活動

ろうきんのCSRとは

- ・既存のNPOの活動を支援しながら、そのフィールドを借りて、職員や顧客である労働組合の方と一緒に環境活動に取り組もう！
- ・10年間にわたって支援しよう！

3

3

1. 開校の経緯

2) なぜ「ろうきん」が森の学校に取り組むのか？

**ろうきん＝
非営利の金融機関**

1. 会員は労働組合等、一般の勤労者
2. 幅広い業種・分野に会員を持つ
3. 社会的認知が高い

森の学校＝労金連のCSR活動

勤労者に対して、楽しみながら参加できる環境貢献活動を提案

「ろうきんの理念」に共感する
森・人・地域を育てる活動

4

4

1. 開校の経緯



3) 全国から5地区を選定(第Ⅰ期は3地区、第Ⅱ期で2地区追加)

全国のモデルとなるべく、自然体験活動の活動実績があるNPO法人と対象地区を選定

新潟地区

NPO法人かみえちご山里ファン倶楽部

福島地区

NPO法人いわきの森に親しむ会

富士山地区

NPO法人ホールアース自然学校
※全国事務局も兼ねる

広島地区

NPO法人ひろしま自然学校

岐阜地区

NPO法人グリーンウッドワーク協会

5

5

2. 活動の概要



～3つの柱～

① 森を育む～里山の再生～

② 人を育む～次代を担う人づくり～

③ 森で遊ぶ～楽しみながら取り組むモデルの発信～

地域と共に行う～様々な関係者との協働～

地域住民、地区ろうきん等、関係者の理解と支援を得ながら活動展開

6

6

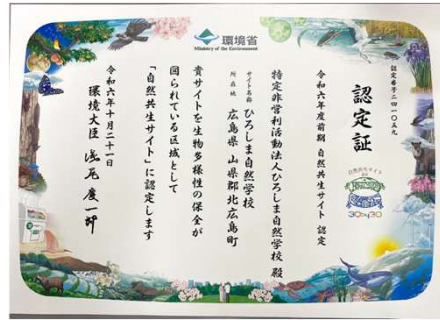
2. 活動の概要

① 森を育む～里山の再生～

荒廃した人工林、二次林を除間伐し、美しい森を再生



人工林の間伐(富士山地区)



環境省 自然共生サイトへ登録(広島地区)

7

7

2. 活動の概要

② 人を育む～次代を担う人づくり～

森林を活用した自然体験活動指導者の育成の他、活動を通じて関係者の環境意識醸成にも取り組む



ローカルSDGs人材育成講座(富士山地区)



地元ろうきん職員研修でも活用(広島地区)

8

8

2. 活動の概要



③ 森で遊ぶ～楽しみながら取り組むモデルの発信～ 楽しみながら里山の自然・地域の知恵を学べるプログラムを実施中



休耕田に小麦を播き、小麦を収穫してパンを焼く「小麦プロジェクト」(広島地区)

9

9

2. 活動の概要



地域と共に行う～様々な関係者との協働～ 地域住民、地区ろうきんなど関係者の理解と支援、協働により活動を展開



広島地区では毎年秋に「森の学校フェスティバル」を地元中国ろうきん等と協働で開催。写真は中国ろうきん発行の「R・ism(リズム)」でのフェスティバル紹介ページ。



新潟地区で恒例となっている棚田保全活動での田植え体験。地元新潟ろうきんの協力を得て開催。

10

10

4. 森の学校の特徴



- ① 「森づくり」から、「人づくり・地域づくり」につなげる自然学校活動
体験的な手法、森の魅力を実感できるプログラムがメイン。
活動を通じて、都市部からの交流人口を増やし地域活性化に寄与。
- ② 現地NPOが主導する「地域主体型」活動の定着
基本方針は全国共通。活動は地域の実情に合わせた柔軟な展開。短期間に成果を焦らず、20年間という長期に亘った活動の定着を重視。
- ③ 支援団体関係者への体験プログラムを通じた「環境マインドの醸成」
支援団体関係者（ろうきん関係者）への研修プログラムを積極的に実施。
自然体験でリフレッシュ、身近な環境問題の実感、チームワークの醸成など、参加者が様々な「森の学校」効果を実感。

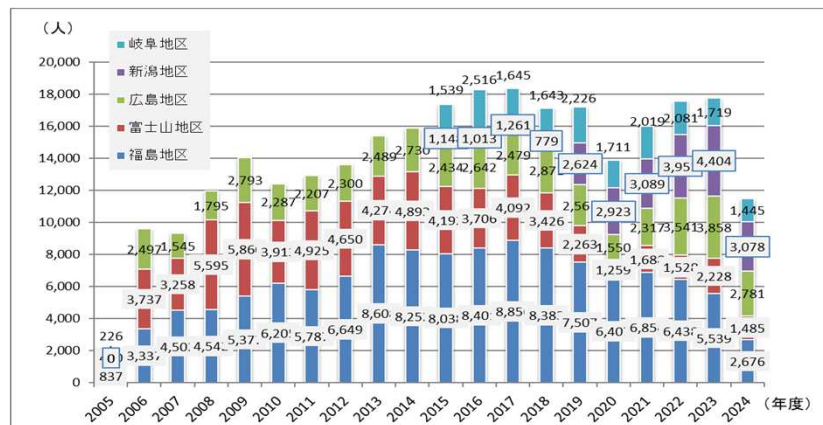
11

11

5. これまで20年間の実績



2006年度より活動が本格化し、のべ1万人以上が毎年プログラムに参加
コロナ禍でも活動を止めずにできることを着実に継続



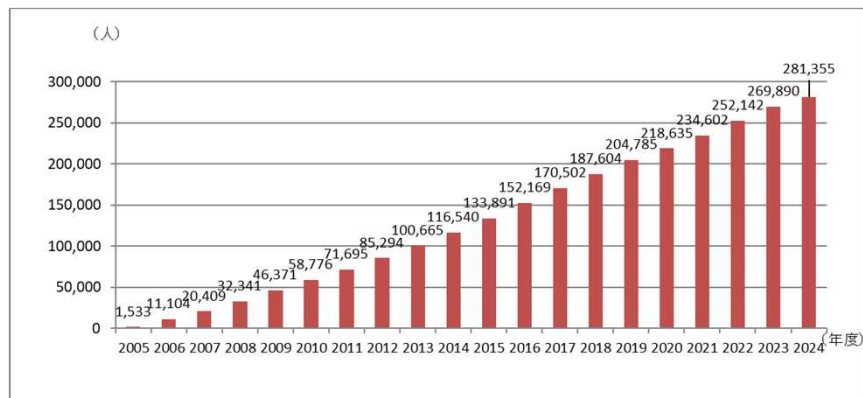
12

12

5. これまで20年間の実績



2024年度までに5地区を合わせて、のべ28万人を超える方が
森の学校に参加 ※2024年度は10月末時点



13

13

6. 今後の予定



2025年度より
ろうきん森の学校は新たなステージへ

- 団体支援から活動支援へ
- より幅広い参加を促進
- 里山を舞台に、SDGs達成に向けた活動を継続
- 生物多様性保全や地域課題解決に取り組む、新しいコモンズ(共有財産)の創出に取り組む

14

14



1

- 設立: 2001年10月3日
- NPO法人認証: 2004年6月
- 設立経緯
2001年7月から9月の間、森との共生をテーマに「うつくしま未来博」が開催され、その理念に共感した有志が集まり、里山を市民の手で再生することを目的に設立した。
- 役員 理事長、副理事長、理事6名、監事2名(全て非常勤)
- 会員 正会員: 81名 家族会員6名 団体会員5名
- 特徴
会員のほとんどが、定年退職後に会員となる
健康意識が高く、ボランティア精神に富む

2

森を育む①

1. 栗園跡地再生整備(2.5ha)

成果: 薪炭林の森林をつくるため整備してきたが、その森林は、今後植林の必要のない再生産可能な森林になった。



毎年、植樹した木が育ち、シイタケのホダ木として利用できるようになった。

3

森を育む②

2. 岩出の郷里山保全活動(12ha)

成果: 2006年に里山保全活動を始めた「岩出の郷」は、地域や親子が年間を通して参加する、地域密着の活動の場所になった。



4

森を育む③

3. 海岸林再生作業

成果：2012年から2022年まで、津波被害のあった場所にマツの苗木を植樹し、延9,409名がボランティア参加し、当会がかかわって完了できた。



地元企業が2016年に植樹した木は、高さ5～6mに成長した。

5

人を育む①

1. 作業機械取り扱い研修支援

成果：湯の岳山荘は、林業研修センターとして建てられたもので、会の発足以来支援してきた。



刈払機とチェーンソー取り扱い研修会をそれぞれ年に4回実施し、参加者約300名にスタッフ40名が支援した。

6

人を育む②

2. 小学校の環境教育支援

成果：会の発足時から小学校とその周辺の里山をフィールドに、教師が行う自然体験活動を中心とした環境教育支援を行ってきたが、環境に関心を持つ子ども達が増えてきた。



コロナ前は小学校12校を支援していたが、コロナ中は7校に減少した。現在は徐々に増えてきた。

7

森で遊ぶ①

1. ろうきん森の学校自然体験活動

成果：会の発足時より実施しており、活動のメインとなっている。
内容も年々充実し参加者も喜んでいる。



・毎月第3日曜日に実施(2月までに343名)

8

森で遊ぶ②

2.湯の岳自然学校inいわき

成果:2022年度からこの事業を始めたが、好評なため継続する。



農業体験(ジャガイモ収穫)

・2月まで74名参加



木工工作(椅子)

自然エネルギー施設の整備

成果:自然エネルギー(太陽光、風力、水力、熱)の4つの施設を1か所に集めたところは市内どこにもなく、小学生の環境学習の場として今後ますます有効になる。



自然エネルギー施設



水車



風力発電



太陽光発電



石臼



足湯



足湯の屋根にペットボトル

11

課題と25年以降の目標

■課題

現在の施設は、2024年3月末で廃止となったが、森の工房を拠点にこれまでどおり活動を行います。水道水とトイレがなく、隣接する丸山公園の施設を使用するようになり、多少不便になります。

会員の高齢化問題はどこも同じですが、当会は健康な高齢者が多いため、その健康年齢を伸ばすよう会員同士のコミュニケーションを図ってまいります。

■目標

湯の岳山荘での活動継続と、当会の特色である小学校の環境教育支援の拡充、地域参加の岩出の郷里山保全活動の充実と、他地区に自然体験活動の場を働きかける。

1. ろうきん森の学校(月1回)
2. 湯の岳自然学校inいわき(年8回)
3. 環境教育支援の拡大
4. 森林整備班、木工班、プログラム班、観察班の定例活動

12

福島地区活動報告



ご清聴ありがとうございました!



1

特定非営利活動法人
かみえちご山里ファン倶楽部

団体概要

- 2002年 NPO法人格取得
- 会員：約280名
うち地域内3割・市内3割・大都市圏3割
- 理事12名、常勤スタッフ5名
- 年間予算：約5,000万円
- 活動地域集落数 25集落

基本理念
山里の自然、景観、文化、
地域の農林水産業を
「守る、深める、創造する」

2

■新潟地区の基本方針

自然と暮らしとのつながりを体感できる
体験活動を継続し、人が集う場づくりを行う

■2019年度 活動の方針

資源の現状把握とハード・ソフト・人材・つながり等のすべての
基盤づくり・基礎固めを行う



ハード整備を活かしたソフト事業
と場作り・仕組み作りを推進

■2024年度 活動の方針

「部会」「クラブ」を中心とした活動の「場」作りを進め、
部会等の目標・目的を共有した仲間作りと活動を推進する

3

3

①森を育む（森林整備、調査活動）

- ・市民の森の散策道整備、草刈り、雑木林の下草刈りや支障木整理を実施。
- ・きのこ畑やネマガリタケ林の整備、ホダ木の追加を実施
- ・専門家による大型動物を中心とした動物調査を実施（定点カメラ設置）



●散策道整備



●分区林内の森林整備



●動物調査



●ネマガリタケ林整備



●きのこ畑の整備



●きのこコマうち 4

4

①森を育む（森林整備、調査活動）

- ・散策道や遊び場が整備され、安全に楽しめる空間が増えた。
- ・きのこ畑やネマガリタケ林の整備が進み、収穫物として成果が見えた
- ・動植物調査にて、ササユリの増加やヤマネの生息域などが確認された



●ササユリの丘の遊び場



●増えつつあるササユリ



●2023年8月に
撮影されたヤマネ



●きのこ畑のナメコ



●原木シイタケ

5

5

②人を育む

- ・スタッフ研修（外部講師又はスタッフ間共有）、安全講習、指導者講習等を実施
- ・インターン生や高校実習の受け入れを行い、就業の場としてのPRを実施
- ・参加者からボランティア・協力者の育成へとつながる場作りを推進



●スタッフ間技術共有



●安全講習（機器整備等）



●ものづくり勉強会
（指導者講習）



●インターン生受け入れ



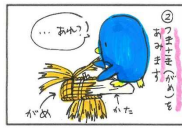
●森の仕事体験in上越（高校生実習）

6

6

②人を育む

- ・インターン生からスタッフへの採用→日々・スキルアップ！
- ・参加者から協力者・指導者へ（ものづくり勉強会、棚田サポーター等）
- ・立場に応じたいろいろな関わり方を提案できた（棚田サポーター、ことこと等）



●インターンからスタッフへ



●両者とも指導者レベル



●古民家改修に女性も参加



●地域の人材発掘・活用 7

7

※ 施設・フィールドの整備

- ・プログラムや活動において、快適性が格段に向上した
- ・雨天時にも活動できる内容が増え、プログラムの幅が広がった
- ・「フィールド整備」そのものがプログラム化（もりっちクラブなど）



●ウッドデッキ整備



●ウッドデッキ新設



●下屋の増設（組み立て式）



●レンガかまど新調



●中ノ俣角間の新展望台

8

③森で遊ぶ（各種体験プログラムの実施：通年）

・年間実施の「棚田学校」、「もりっちクラブ」、「子ども山里学校」、「ものづくり体験会」などで、リピーターおよび通年参加者が増加し、「自分たちで自分たちの活動を作り上げる」という意識が高まっている



●かかし作り（棚田学校）



●鎌とぎ（棚田学校）



●ものづくり体験会



●堆肥作り（もりっち）



●栈橋塗装（もりっち）



●子ども山里学校

9

③森で遊ぶ（各種体験プログラムの実施：季節プログラム）

・季節プログラムでは、初めての人でも気軽に楽しく森に親しんでもらえるように内容を精査する一方、安全に考慮しながらも、クモ観察会やライトトラップなど新たな試みにもチャレンジできた。



●クモ観察会



●ライトトラップ



●川遊びプログラム



●夏のふるさと探検



●森林整備と秘密基地作り



●親子がちキャンプin桑取谷

10

④森とつながる・人とつながる →新たな気づき！

- ・岐阜地区との技術交流では、自らのフィールドの資源や新たな視点に気づかされ、またプログラムへの実践的な応用もでき、とても有意義であった
- ・子どものたまり場事業は、学校や地域との連携および保護者や地域の協力者により幅広い活動となった



●キハダを使ったものづくり・わら細工（岐阜地区との技術交流会）



●子どものたまり場事業（川遊び、森遊び、チェコとのオンライン交流等）¹

11

⑤地域との連携

- ・地域との共同作業を通じ、地域資源の把握および課題等の聞き取りができた
- ・地元小中学校との連携により地域課題の把握ができた



●用水清掃（中ノ俣）



●水道補修（横畑集落）



●増沢住民との共同作業



●山菜祭り等での出店



●地元小学校クラブ活動の指導



12

12

⑥ろうきん関係者との連携

- ・新潟ろうきんの皆さんによる月1回程度の定例活動により定期的な整備が進んだ
- ・新潟ろうきんの新人研修の場として、またシニア倶楽部や散策会等の場として利用いただき、連携実績を作ることができた



●くわどり市民の森整備活動（きのこ畑、ネマガリタケ林の整備と収穫）



●新潟ろうきん新人研修

●中ノ俣棚田での田植え・稲刈り

13

13

■2024年度までの成果と課題

- ・継続は力なり！事業や活動を「自分事」として捉えて、発展しながら継続したい
- ・「きっかけ作り（つながり作り）」で終わらず、活動への参加や協力、継続に結びつけたい



■2025年度 活動の方針

いろいろな人が・いろいろな立場で・いろいろなペースで
目標を見据えた達成感のある活動に参加できる場を作り、
継続する

- 地域で子どもを育てるUターン教育 <子どものたまり場事業>
- 親子で取り組む自然体験活動 <もりっちクラブ>
- 伝統技術・生活技術の継承とものづくり <ちょいワラ体験会>
- 棚田の保全と継続の仕組み作り <棚田サポーター>
→連合会・新潟ろうきんによる田植え・稲刈りサポーター

14

14

ろうきん森の学校20年のあゆみ

富士山地区の成果とこれから



NPO法人ホールアース自然学校

1



ホールアース自然学校

● この時間でお伝えすること



1. ホールアース自然学校の概要
2. 富士山地区としての20年の成果
3. 課題と2025年以降の目標

Whole Earth Nature School

2

活動のスローガン「自然語で話そう！」

「自然語」を身につけるために…

- 自然体験を通じて感性を研ぎ澄ます。
- 仲間や社会や自分との対話を重ねる。
- その過程で、自身の「自然観」を
獲得し、暮らしに反映させる。

●主な活動：

- 1) **自然体験／環境学習プログラム**
※キャンプ・エコツアー・修学旅行受入・食育PG等
- 2) **企業の環境活動／社員研修支援**
- 3) **行政事業の受託** ※環境・農林・教育・観光分野
- 4) **施設運営** ※自然ふれあい施設、少年自然の家、公園等
- 5) **農業（無農薬栽培）／野生鳥獣対策（狩猟・ジビエ）**
- 6) **生物多様性保全**

- 創 立：1982年
- 常勤職員数：35名
- 年間売上：約3億5,000万円
- 拠 点：静岡、沖縄、福島、新潟、岐阜
- 受 賞：エコツーリズム大賞（2007年）
日韓国際環境賞（2018年）等



◆ 森を育む

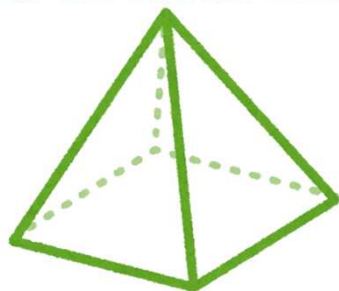
- ★小さく、順応的に、状況に合わせたフィールド管理。
 - 対象地の自然特性・地域特性に合わせた管理を実施。
 - 管理方針のベースとなる情報（生き物、林業、水脈、教育など）収集は、専門家によるレクチャーからも。
 - 関わる地域の人々やスタッフやボランティアの意向も汲みながら作業を実施。
 - 蓄積されたノウハウは「森の学校」以外のPJにも。



5

◆ 人を育む

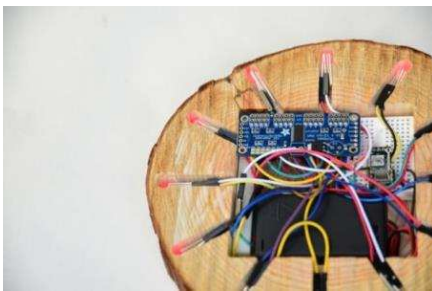
- ★関わった歴代スタッフは、“大きな底面”を獲得。
 - 森・人・地域と「事を成す」際の多様な知識・技術、自身のあり方を獲得。それらを“大きな底面”として、新たな「事」を築き上げている。
- ★生活者一人ひとりを、子どもや学生を、時に指導者を。
 - 「森の学校」は、常に人々の学び舎であり続けた。スタッフと共にたくさんの学び・気づきを創発した。



6

◆ 森で遊ぶ

- ★森の学校で起こした“小さな洞”を、団体の収益事業へ。
- 新たなチャレンジを支えてもらった。時代の「半歩先」を意識した企画を展開し、素早く改善を重ねた。
- dPDCA：小文字の“do” から始まるサイクルに、臆することなく立ち向かうことを可能にしてもらった。
- ここから幾つもの収益事業が生まれ、そのノウハウは全国各地の環境教育団体にも参考にされている。



7

◆ 地域との連携①

- ★フィールドがある柚野地区/猪之頭区との連携が進展。
- 間伐材の地域内循環の仕組み、地域住民による講師、小学校の屋外授業、年1回の地元意見交換会など。
- ★「森の学校」での連携を核とした、新たな動きの発生。
- 県内大手ホームセンターが隣接地で活動開始、猪之頭区の森や水をテーマにした体験ツアー開発、猪之頭振興協議会の設立、特産物の開発・販売など。



8

◆ 地域との連携②

★地域の労福協や労働組合、各支店との連携企画が好評。

- コロナ禍から連携が急加速。様々な活動が森の学校のフィールドなどで実施されている。
- キーワードは交流・地域貢献・家族参加・研修・周年イベントなど。
- 年間で、労福協2団体・労組10団体くらいを対応。
- 各団体とも、年間予算に活動費を計上してくれている。



9

◆ 課題と2025年以降の活動

(A) 市民活動としての森林環境再生活動

- 受益者負担が困難な、地道な森林環境再生活動は常に存在する。こうした活動は「森の学校」の支援により継続していきたい。

(B) 若い世代に向けた人材育成プログラムの継続

- 持続可能な社会を構築していくための考え方や技術の「習得の仕方」を学ぶ研修。ここ1～2年のトライアルで掴めた感覚を大切に継続していきたい。

(C) ろうきん関係者のプログラム実施

- 主に連合会の皆様向けプログラムを継続したい。「研修」という切り口を提案していきたい。

10

ろうきん森の学校 岐阜地区 since2015

岐阜地区10年のあゆみとこれから

2025年3月14日

NPO法人
米 グリーンウッドワーク協会
<https://www.greenwoodwork.jp>

0



NPO法人グリーンウッドワーク協会について

- ・ 2008年発足（今年で17年目）
- ・ 生木を使った人力の木工を広める活動を展開



1

 成果 拠点整備

ワークショップによる自力建設



2

 成果 森を育む

実のなる森づくり・獣害対策、原木マイタケの栽培



3

 成果 森を育む

ものづくりのための自然素材の調達（木材・草木染）



4

 成果 森を育む

ものづくりのための自然素材の調達（草や樹皮で椅子の座編み）



5

 人を育む

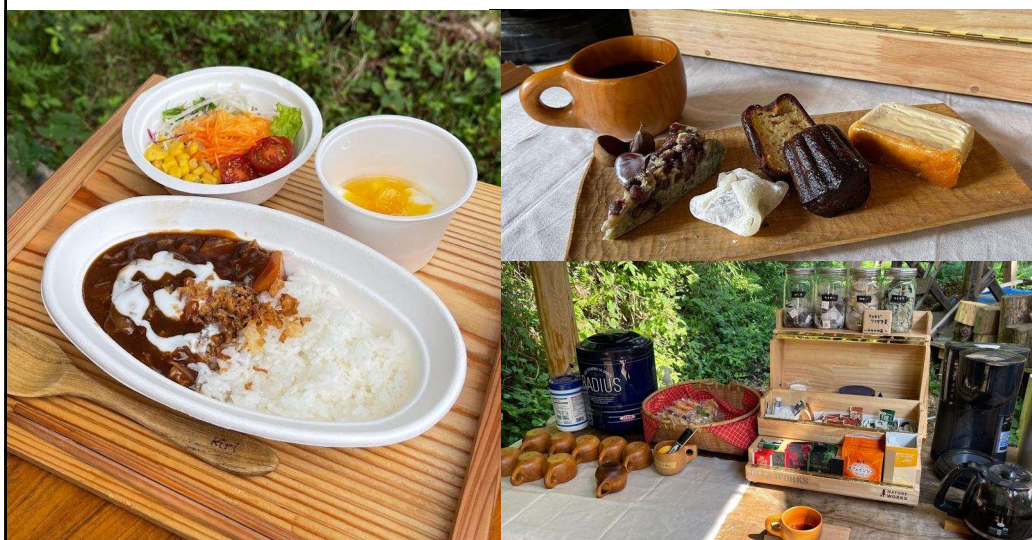
子どものナイフワーク指導者講習・スタッフの育成(草木染講座)



6

 森で遊ぶ

森の工房やキッチン、カフェからはじまる森の時間の充実を図る



7

7

森で遊ぶ

森工塾（もっこうじゅく）季節の講座・暮らしのものづくり



8

地域との連携



地域の団体・教育施設との連携

- ・地域の里山団体との共同イベント
- ・保育園・森のようちえんへの支援
- ・専門学校（森林文化アカデミーとの連携）
- ・武義高校課題研究（森のお困りごと解決）

9

9

これからの課題と目標



通いたくなる森づくり

- ・実のなる森づくりの展開
- ・森での癒し、ものづくりの癒し

地域との連携強化

- ・武義高校との連携を継続
- ・新たな風を取り込む

収益基盤の強化

- ・魅力あるコンテンツの発信
- ・企業研修の実施など

10

10

 NPO法人
グリーンウッドワーク協会
<https://www.greenwoodwork.jp>

11

広島地区

特定非営利活動法人
ひろしま自然学校

フィールド紹介





ひろしま自然学校について

〈設立〉

2005年8月

20年で **5万人**

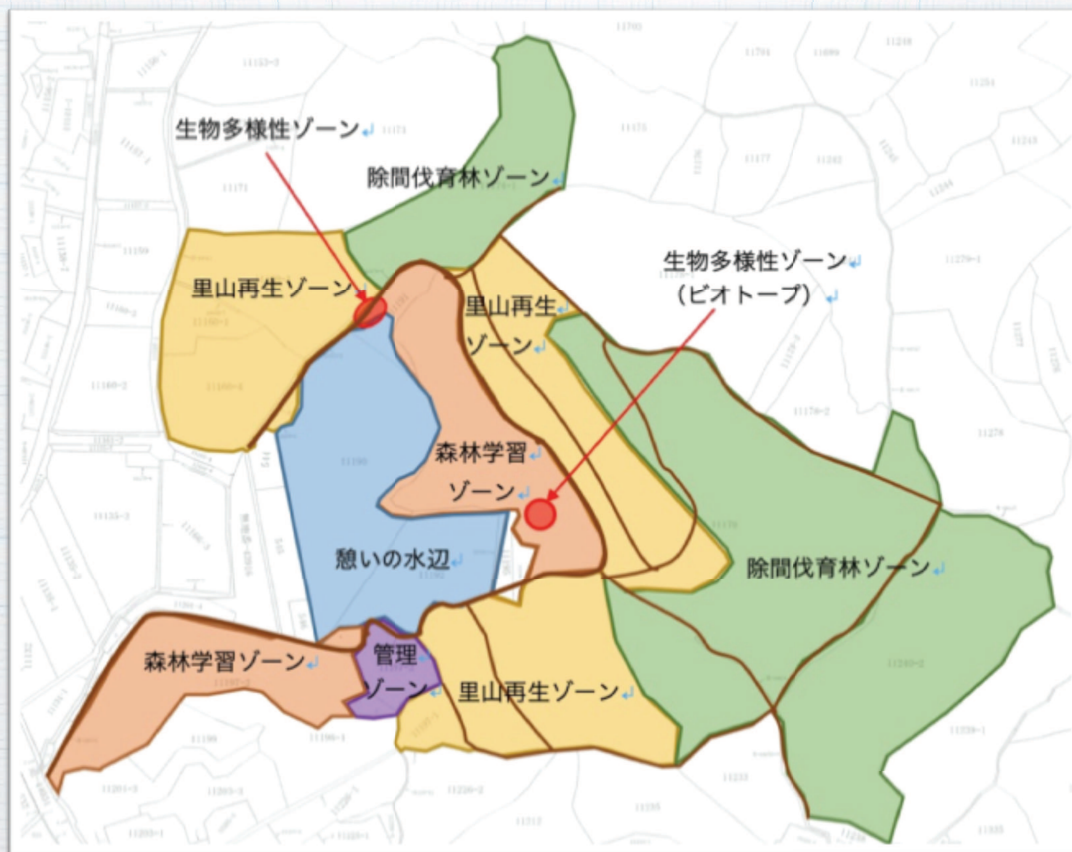
〈フィールド〉

広島県山県郡北広島町にある11haの里山

〈目的〉

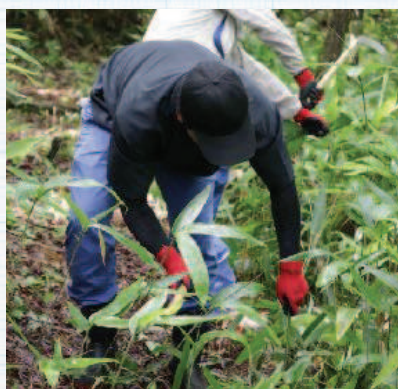
子どもから大人までのすべての人に対して、環境教育、自然体験活動などの普及・啓発、調査研究、人材育成に関する事業を行うことで、地域文化や自然環境を保全しもって持続可能な社会の実現に寄与すること。

森を育む 里山整備

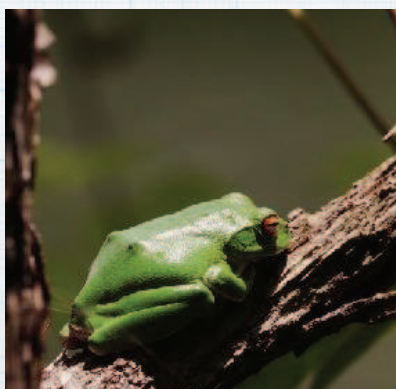
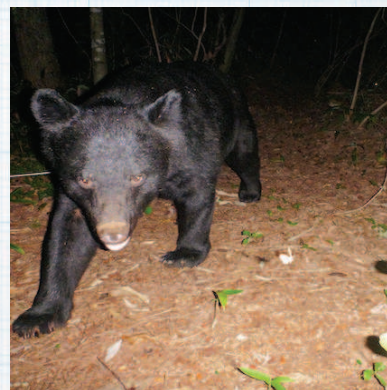


森を育む 里山整備

約 9,000人



森を育む 生き物調査



人を育む ユースリーダー



森で遊ぶ 夏の長期キャンプ



森で遊ぶ アースキーパーズ



日付	スケジュール
6月23日(金)	電気を消す。 「おれがききかた」を聞き、読みます。
6月24日(土)	「おれがききかた」を聞き、読みます。 「おれがききかた」を聞き、読みます。
6月25日(日) ～27日(火)	「おれがききかた」を聞き、読みます。 「おれがききかた」を聞き、読みます。
6月28日(水)	「おれがききかた」を聞き、読みます。 「おれがききかた」を聞き、読みます。
6月29日(木)	「おれがききかた」を聞き、読みます。 「おれがききかた」を聞き、読みます。

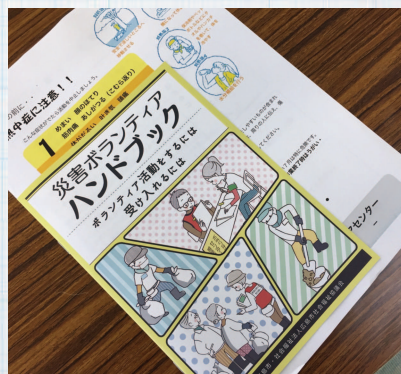
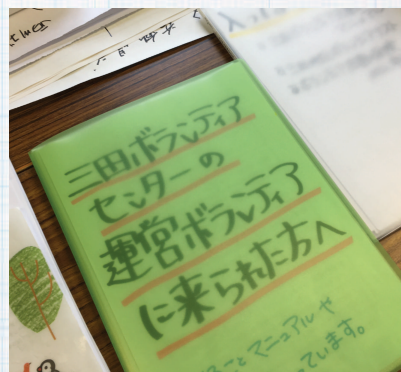
地域連携 森の学校フェスティバル



地域連携 企業・団体



地域連携 災害支援



20周年 現在の課題と展望

【森を育む】

- ＊自然共生サイト認定に伴う生物調査の継続実施
- ＊森の整備と生物調査人材の高齢化
→新しい担い手の育成

【人を育む】

- ＊地域課題解決の人材養成（CWTは主に現役世代対象）
→ユース世代の育成（ローカルSDGs人材育成）
- ＊周辺地域の環境教育の質の低下
→質の高い環境教育指導者の育成

【森で遊ぶ】

- ＊里山と市街地の隔たり深刻化（野生動物リスクへの過剰反応）
→新たな里山活用ライフスタイルの提案

ひろしま自然学校 NEXT10

「さとやまコモンズ自然学校」として

【まなぶ】 自然体験から学び 里山の価値に気づく

＊オルタナティブな学び ＊ワークショップで創り出す

【まもる】 里山の生態系を見守りながら手入れする

＊ボランティアによる定例活動 ＊企業・地域との協働

【つかう】 里山の恵みを活用する ライフスタイルへ

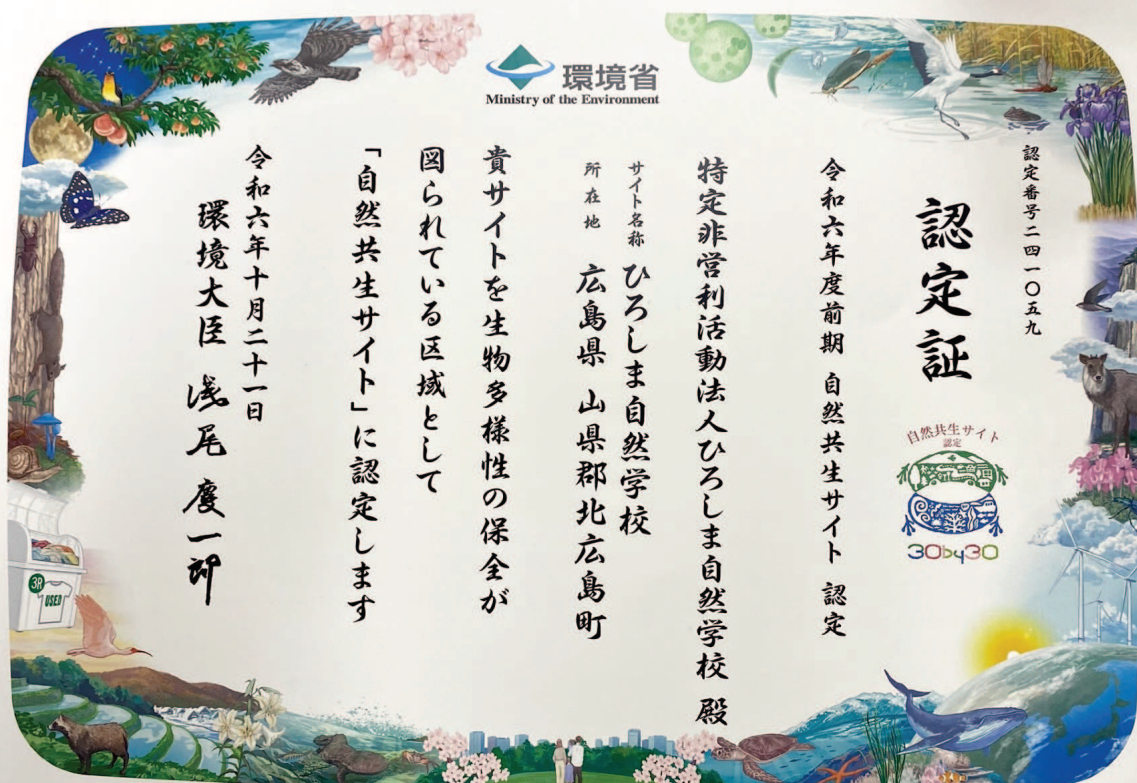
＊ものづくり ＊自然調和型拠点づくり ＊レジャー ＊食

【話題提供】

さとやまコモンズ 自然学校

NPO法人ひろしま自然学校
古本 敦子

環境省自然共生サイト認定 R6前期



なぜいま生物多様性？

気候変動対策 → 循環型経済

→ 生物多様性保全

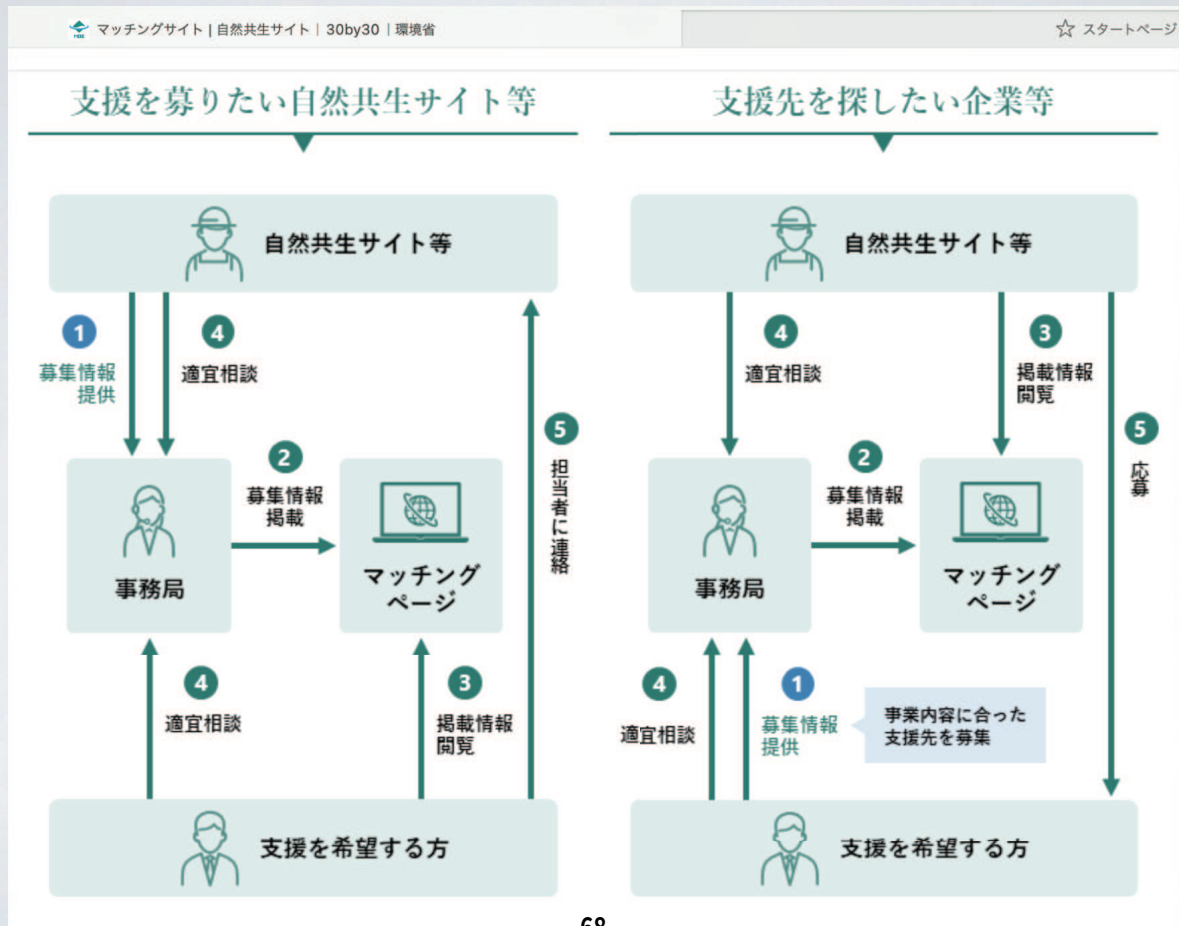
自然資本依存GDP 44兆ドル

損失のビジネスリスク

SATOYAMAイニシアティブ

世界をリードする日本企業

環境省 支援マッチングのしくみ



自然共生サイト申請 必要情報

土地（境界図）

地権者の許可

生物多様性の価値

保全活動・調査 計画



里山コモンズ！

コモンズ

＝

共有財産

入会地,水利権,漁業権…

共同管理・共通の利益

ひろしま自然学校が管理する
11haの里山



7人の地権者+水利組合

から10年単位で借り受ける
(第3期で30年に)

誰もが気軽に利用できる里山として開放

自然学校的 さとやまコモンズ

里山に

縁とゆかりのある人(地主)が
縁もゆかりもない人(よそ者)に対して
個人の所有物(里山)を開放することで
さまざまな縁が生まれる



その**縁が里山の課題解決**につながる

多様な主体の参加・参画のしくみ



**ウェル
ビーイング**

**いきがい
やりがい
健康
教育**

...

不易流行

昔からのコモンズを参考に
新たなコモンズ概念を
創造していく

閉鎖性
画一性
強制力



開放性
多様性
ゆるやか

これまでのコモンズ

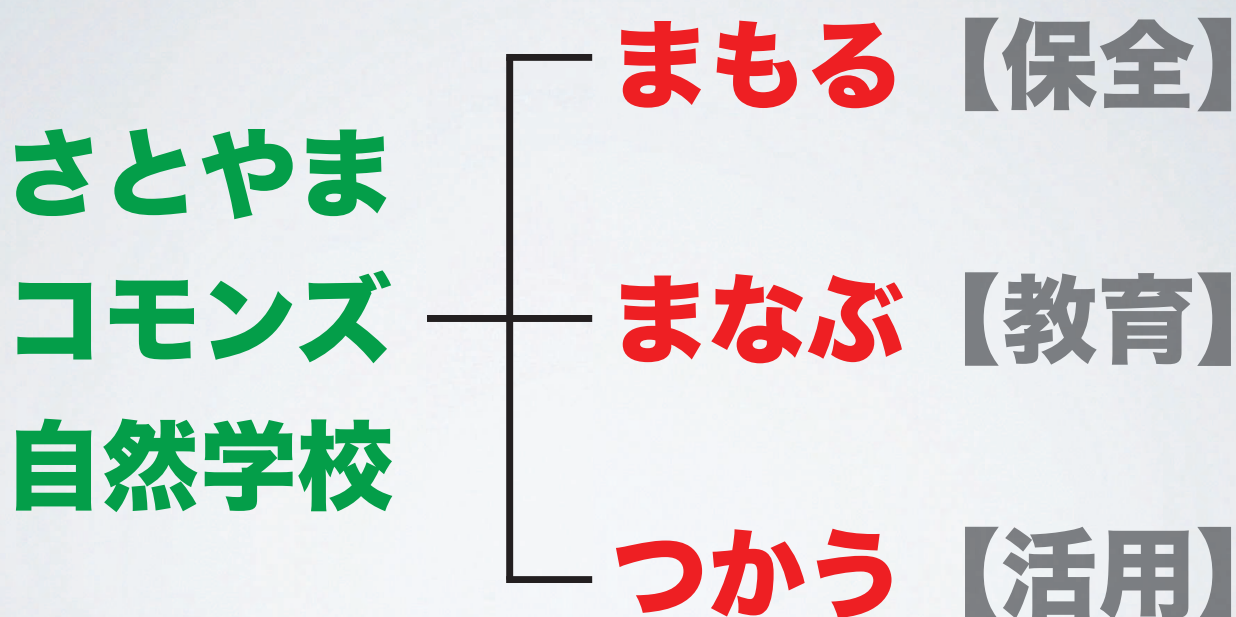
自然学校的コモンズ

自然学校的 さとやまコモンズ 持続可能に



民主的・水平的な自治
人も含むすべての生き物

さとやまコモンズ自然学校の3つの柱



ろうきん森の学校20周年記念シンポジウム
「地域共生型ソーラーシェアリングを通じた社会課題への挑戦」



2025/3/14
たまエンパワー株式会社
株式会社さがみこファーム 山川 勇一郎

1

【Profile】

山川 勇一郎

- ・1975年東京都多摩市生まれ(49歳)
- ・慶應義塾大学 政策・メディア研究科
社会イノベーターコース(金子郁容研:2011)
- ・ホールアース自然学校(2002~2013)
ろうきん森の学校富士山地区初代担当
国際室長・CSR推進室長・執行役員等を歴任



たまエンパワー(株)

CEO/Founder
本社: 多摩市
創業: 2015年
資本金: 3000万円
従業員: 7名(役員含む)
事業:
・太陽光開発事業
・脱炭素コンサルティング



(株)さがみこファーム

CEO/Founder
本社: 相模原市
創業: 2019年
資本金: 2700万円
従業員: 9名(期間雇用を含む)
事業:
・観光農園事業
・生産・加工事業



コーポレートミッション:

『食とエネルギーで自然と調和した地域の未来を創る』

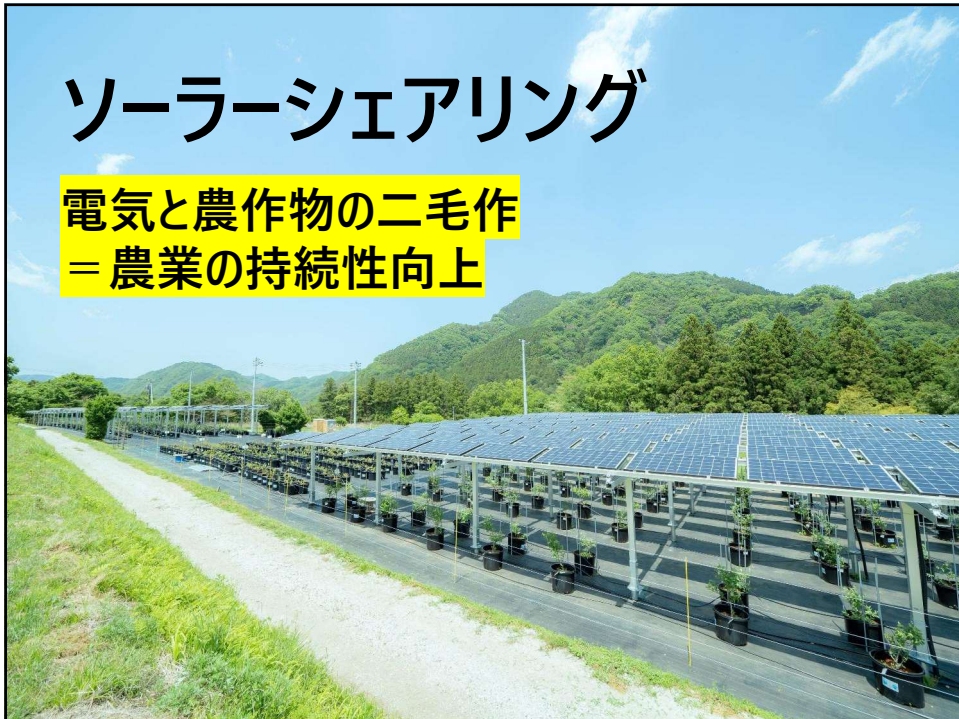


SAGAMIKO FARM inc.

2

ソーラーシェアリング

電気と農作物の二毛作
＝農業の持続性向上



3

楽しみながら学べる体験農園 『さがみこベリーガーデン』を運営（相模原市）



4

**36種類の大つぶブルーベリーが食べホーダイ！
(6～8月)**



5



**授粉用に養蜂も
昨年は大豊作!!**



6

『地域共生型ソーラーシェアリング』



- ▶ 地域内外が一体となった事業展開
- ▶ 農業・地域・エネルギーの課題解決を目指す



7

きっかけは東日本大震災



発災後、福島県いわき市
緊急支援の活動へ

8



『コンセントの向こう側』



9



子どもたちに安心安全な未来を

水・食糧・エネルギー

大切なものを自分たちの手に取り戻そう。

▶ 地元・多摩市にUターン／再エネビジネスを立ち上げ



10



11



12

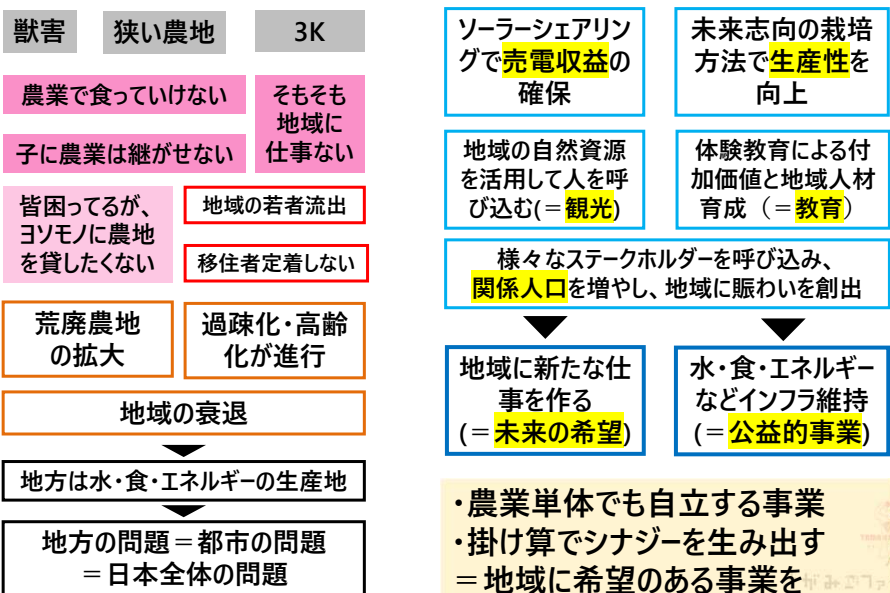
約6年前



▶耕作放棄地をソーラーシェアリングで再生する

13

社会課題に対する私たちのアプローチ



14

4つのコンセプト

①食とエネルギーの地域生産



現在312kW
→2000kWの計画進行中

②未来志向の栽培方法



高品質のものを安定供給
→ポット養液栽培

③多様な雇用の創出



地域の仕事づくり
→子育てママ、障害者就労B型

④6次産業化へのチャレンジ



新商品の開発を地域連携で



15

「楽しみながらまなぶ」体験型農園



▶耕作放棄地＝獣害＝社会課題の最前線
＝SDGsの生きた教材に

▶小・中・高・大学生、企業研修のフィールドに
(年間30～50団体が視察・研修に来訪)



16

地域共生の取り組み

①地域防災



「前戸自治会と非常時の電源供給協定」

- ・自治会がバッテリー所有、停電時に太陽光の電源を無償供給
- ・共助の仕組みづくり

②教育



- ・青和学園の職場体験・探究の受入
- ・子どもたちは地域の宝。教育にコミットすることで、地域の信頼をより強固に。

▶地域に「さがみこファームが来てよかった」と思ってもらえる存在に。



17

地域活性化の取り組み

③観光



小型EVを使った津久井地域の周遊ツアーの開発

④スポーツ



ダイナボアーズの選手と

- ・「SMAK共創型地域振興協議会」
- ・地域事業者が協働で、面として地域へ観光客の誘客

- ・三菱重工ダイナボアーズ（プロラグビーチーム）との連携
- ・スポーツ×地域振興



18

ソーラーシェアリングへの社会的まなざしの変化

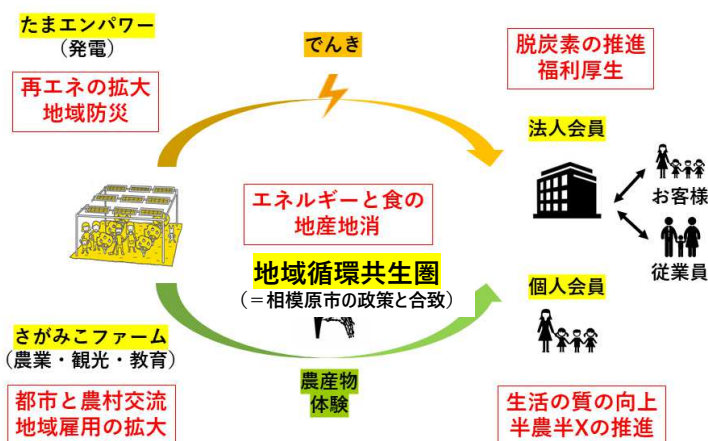


- ・資源エネ庁 地域共生型再エネ事業顕彰（2022）
- ・相模原市 さがみはらSDGsアワード市長賞（2023）
- ・多摩信用金庫 多摩ブルーグリーン賞（2023）
- ・JPEA ソーラーウィーク大賞優秀賞（2023）
- ・神奈川県 かながわ脱炭素大賞（2024） ほか



19

地域外の企業を巻き込んだ地域循環の創出



- ・地域だけだとなかなか課題解決は困難
- 電気の販売に留まらない「電気を軸にした地域づくり」
- 「コーポレート会員」制度を創設（＝現在11社）

©SAGAMICOFARM

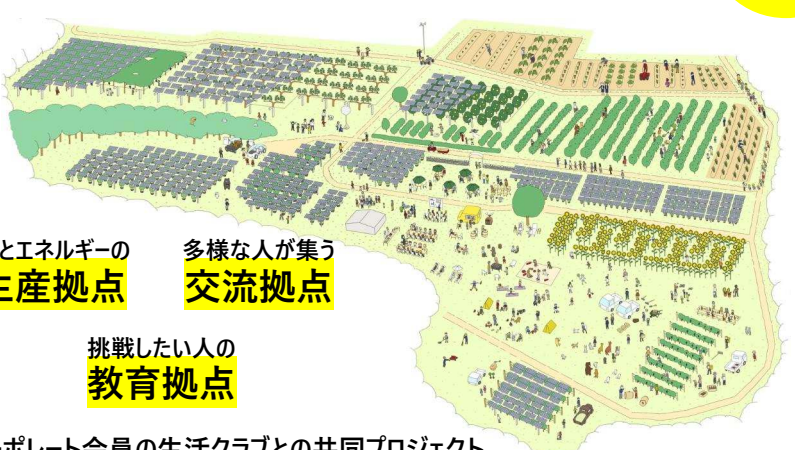


20

ソーラーシェアリングで

「食とエネルギーのテーマパークをつくる」

2025
春竣工



食とエネルギーの
生産拠点

多様な人が集う
交流拠点

挑戦したい人の
教育拠点

- ・コーポレート会員の生活クラブとの共同プロジェクト
- ・ブルーベリー農園の隣に約300kWのNon-FITソーラーシェアリングを建設
- ・ブドウ・イチジク・レモンの栽培をスタート。体験農園の魅力UP
- ・地域連携によって地域の課題解決と活性化を

サガミコーポラル
SAGAMICO FARM INC.

THINK TOP POWER
サガミコーポラル

21



『食とエネルギーで自然と調和した地域の未来を創る』

22

22



ろうきん森の学校20周年記念シンポジウム
「NPOとは何か」を考える

慶應義塾大学 宮垣 元

宮垣 元（慶應義塾大学 総合政策学部 教授）

■兵庫県出身。慶應義塾大学環境情報学部。同大学院政策・メディア研究科修士課程・後期博士課程。博士（政策・メディア）。第一生命経済研究所、甲南大学文学部社会学科教授などを経て、現職。台湾国立政治大客員教授，University of California, Berkeley客員研究員など。

■専攻：

社会学，経済社会学，非営利組織論，コミュニティ論。

90年代よりNPO研究に従事。兵庫や神奈川はじめ各地の実態調査など。

■主な著書：

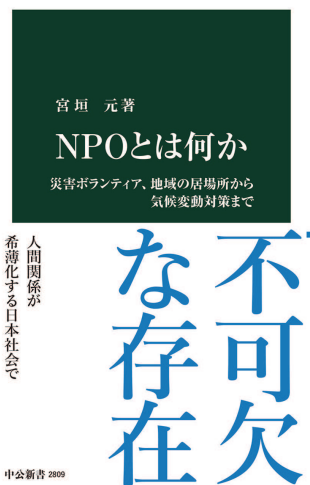
『ヒューマンサービスと信頼 ―福祉NPOの理論と実証』（慶應義塾大学出版会，2003）

『その後のボランティア元年 ―NPO・25年の検証』（晃洋書房，2020）

『入門 ソーシャルセクター ―新しいNPO・NGOのデザイン』（ミネルヴァ書房，2020）

『ヒューマンサービスとコミュニティ ―支え合う社会の構想』（勁草書房，2022）

『社会イノベーションの方法と実践』（慶應義塾大学出版会，2023）



NPOとは何か

災害ボランティア、地域の居場所から気候変動対策まで

宮垣 元 著（中公新書, 2024）

序 章	社会に浸透するNPO
第1章	求められる時代背景
第2章	複雑な顔を持つ組織
第3章	NPO法とはどのようなものか
第4章	参加意識と活動実態
第5章	市民による公益活動の長い歴史
第6章	なぜ社会に必要か ー非営利組織の存在意義
第7章	「分かちあう組織」を創る

「NPO」を取り巻く昨今の状況

- 「NPO」という言葉は、社会で注釈なく使われ、その存在も珍しくなくなった時代
(関わりのある人からすると…) いまさらNPOとは？
(関わりのない人からすると…) アヤシイ存在なの？
- 社会に欠かせない存在で、増加し多様化する方向だが、現実と理解のギャップ大
一方で、90年代の状況を知らない人も、先入観だけに基づく言説も…
- 世界的な関心の高まりのなか、企業・行政との協働も広がる方向にあり、改めて「NPOとは何か」について確認したい…、という時代状況もある

主体・対象を示す関連語のワードマップ

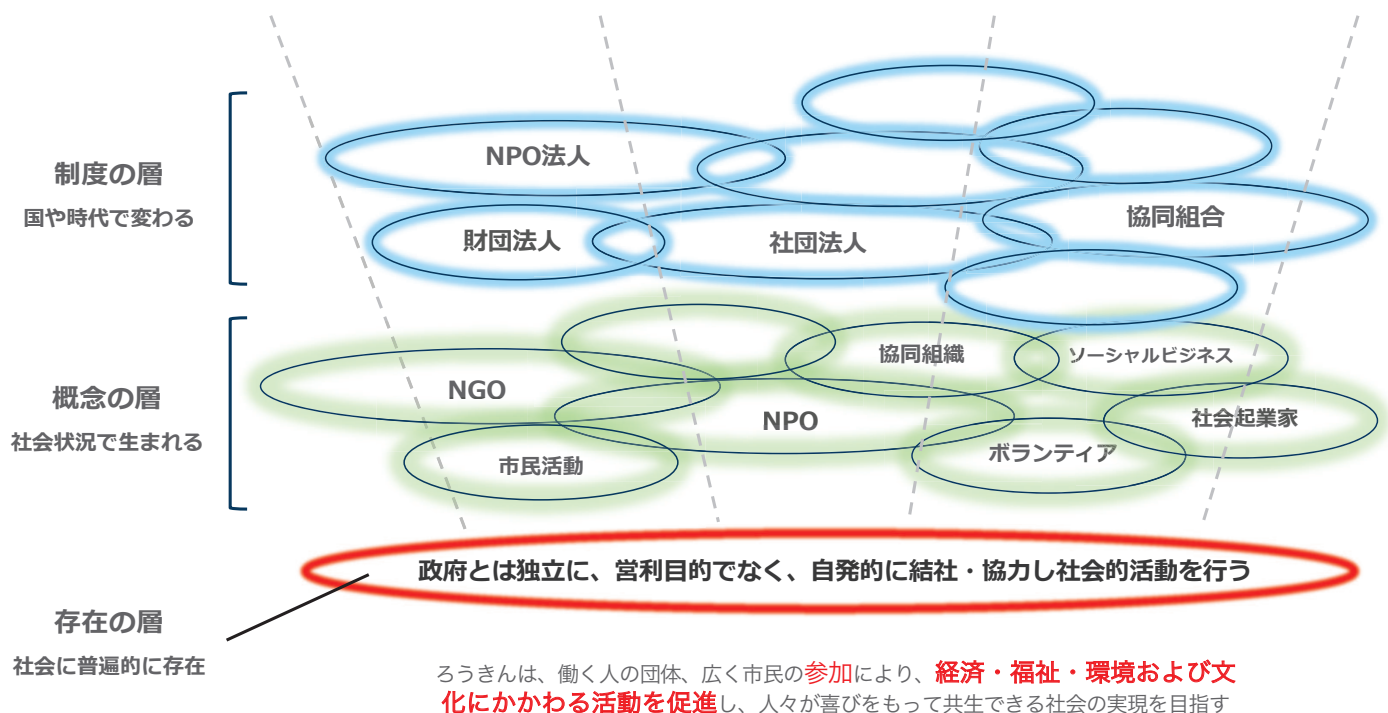
Nonprofit Organization / Not-for-Profit Organization(NPOs), Non-governmental Organization(NGOs), Social Economy, Corporative, Charity, Civil Society Organization(CSOs), Community Based Organization(CBOs)

Social Sector, Nonprofit Sector, Voluntary Sector, Third Sector, Independent Sector, Civil Society, Solidarity Economy

Social Entrepreneurship, Social Business, Social Enterprise, Community Business, Philanthropy, Corporate Social Responsibility(CSR), Pro bono, Social Innovation, Sharing Economy

「NPO/NGO」「NPO法人」「認定NPO法人」「民間非営利組織」「市民活動団体」「ボランティア/活動/グループ/団体」「市民社会組織」「協同組合」「一般・公益社団／財団法人」「労働者協同組合」「ワーカーズコレクティブ」

「市民セクター」「シビルソサエティ」「社会的経済」「連帯経済」「サードセクター」「ソーシャルセクター」「非営利・協同セクター」「社会起業家」など…





里山コモンズ自然学校としての『ろうきん森の学校』の意義

日時：2025 年 3 月 14 日（金）13:30 ～ 16:30

場所：労働金庫連合会 2 大会議室

主催：NPO 法人ホールアース自然学校 共催：労働金庫連合会

協力：NPO 法人いわきの森に親しむ会、NPO 法人かみえちご山里ファン倶楽部、NPO 法人グリーンウッドワーク協会、NPO 法人ひろしま自然学校

【スケジュール】

13:00～	開場・受付開始
13:30	開会、挨拶（労働金庫連合会）
13:35～	第 1 部 リレー報告「ろうきん森の学校 20 年のあゆみ」 全国事務局・5 地区より 20 年間／10 年間の成果報告
14:35	休憩（5 地区展示の紹介）
14:50	第 2 部 パネルディスカッション「里山コモンズ自然学校としての ろうきん森の学校の意義」 ・パネリスト自己紹介（5 分） ・パネルディスカッション ① 里山コモンズ自然学校とは ② ろうきん森の学校の意義 ・ゲストコメンテーターによるミニ講話「NPO とは」など
16:20	第 2 部終了、挨拶（ホールアース自然学校 山崎宏代表理事）
16:30	閉会
17:00	情報交換会 開始
18:00	情報交換会 終了

2005 年に開校した「ろうきん森の学校」は 2025 年に 20 周年を迎えました。これまでの取り組みをふりかえると共に、2030 年に向けて里山を新たなコモンズ（共有財産）として捉え直し、NPO が果たすべき役割について考えます。ゲストコメンテーターは NPO 研究の第一人者の慶應義塾大学総合政策学部教授・宮垣元氏です。

ゲストコメンテーター

宮垣元氏（慶應義塾大学総合政策学部教授）



1970 年兵庫県生まれ。1994 年慶應義塾大学環境情報学部卒、2001 年同大学大学院政策・メディア研究科博士課程単位取得退学、博士（政策・メディア）、同年より甲南大学文学部社会学科専任講師、同教授などを経て、2014 年より慶應義塾大学総合政策学部教授。専攻は社会学、経済社会学、非営利組織論、コミュニティ論。著書『NPO とは何か』中公新書 2024 年 など

パネルディスカッション パネリスト略歴

古本敦子氏（ひろしま自然学校 代表理事）

1972 年広島県生まれ。大学院で昆虫生態学を専攻し修士課程修了の後、伊丹市昆虫館学芸員として 6 年間務める。2007 年から NPO 法人ひろしま自然学校で環境教育や自然体験事業に 8 年間従事した後、家族に伴い滋賀県に転居し、ひろしま自然学校の仕事を一部継続しながら、短大非常勤講師や環境 NPO 研究員などを経て、2023 年 7 月から現職。

山川勇一郎氏（株式会社さがみこファーム代表取締役）

1975 年東京都多摩市生まれ。フランチャイズ本部を経て、2003 年ホールアース自然学校に入社。ろうきん森の学校の立ち上げから第 1 期の運営に関わる。2013 年より地元・多摩市で地域エネルギー会社の立ち上げに参画。2015 年たまエンパワー株式会社を設立。2019 年株式会社さがみこファーム設立。太陽光発電の下で農業に取り組む「ソーラーシェアリング」に取り組む。2023 年相模原市に体験農園「さがみこファーム」グランドオープン。

山崎宏氏（ホールアース自然学校 代表理事）

1971 年静岡県生まれ。大学院で環境保全に関する社会制度などを研究。修士課程修了後、財団法人日本野鳥の会の嘱託研究員を経て、専門学校講師として教育現場に 6 年間従事。2007 年ホールアース自然学校入社。2014 年 4 月よりホールアース自然学校を構成する法人のひとつである「NPO 法人ホールアース研究所」（現「NPO 法人ホールアース自然学校」）の代表理事を務める（現在に至る）。

渡邊恵美氏（かみえちご山里ファン倶楽部 理事）

1972 年新潟県生まれ。大学院で植生学について学ぶ。修士課程修了後、地元上越市に戻り（一財）上越環境科学センターにて 5 年間勤務する。NPO 法人木と遊ぶ研究所での森林ボランティアを経て、2002 年 NPO 法人かみえちご山里ファン倶楽部に就職。2017 年より理事を務める（現在に至る）。

社会貢献活動

■ ろうきん森の学校



この事業は「国連生物多様性の10年日本委員会(UNDB-J)」が推奨する事業として認定を受けています。



「ろうきん森の学校」は「森づくり」から「人づくり」、「地域づくり」につながる活動です

労金連は、2005年に創立50周年を記念して、「ろうきん森の学校」を開校しました。最初の10年間で「第Ⅰ期」、2015年からの10年間で「第Ⅱ期」として、継続して取り組んでいます。

「会員が行う経済・福祉・環境および文化にかかわる活動を促進し、人々が喜びをもって共生できる社会の実現に寄与する」を理念に掲げる「ろうきん」と、「人・自然・地域の共生する暮らしの実践を通じて感謝の気持ちと誇りを持って生きている社会を目指す」を理念に掲げるNPO法人ホールアース自然学校が共感・協働して、全国5地区のNPOと共に活動を展開しています。

これまでに、「国連生物多様性の10年日本委員会(UNDB-J)」が推奨する連携事業に認定されたほか、第5回いきものにぎわい企業活動コンテストにおいて「公益社団法人国土緑化推進機構理事長賞」を受賞するなど、各方面から、長期にわたる活動に対する評価をいただいています。

3つのキーワードと6項目の基本方針に基づく各地区の具体的な活動は、SDGsの「目標15.陸の豊かさを守ろう」はもちろん、「目標3.すべての人に健康と福祉を」、「目標4.質の高い教育をみんなに」、「目標13.気候変動に具体的な対策を」、「目標17.パートナーシップで目標を達成しよう」など複数の目標の連鎖的な達成につながっています。

活動の3つの柱



1 森を育む
植樹・間伐・下刈り等の森林整備活動



2 人を育む
森づくりや環境教育リーダーの育成



3 森で遊ぶ
里山を活用した自然体験・環境教育プログラムの開発と実施

キーワード

- 厳しい環境の中で働く勤労者等に精神的な安らぎを与える「緑」
- 身体を動かす喜びと「健康の維持」
- 「地球環境保全」への共感と参画

基本方針

- 地球温暖化防止に対して足元から取り組みます。
- 地域の多様な自然を取り戻します。
- 里山を活かした暮らしの提案・発信をします。
- 森づくりから始める人づくりを行います。
- 地域全体で活動に取り組みます。
- 自律した運営をめざします。



SNS (note)を活用した情報発信により、各地区NPOの活動や森の学校に関わる人たちの想いを記事や写真で紹介しています。

https://note.com/roukin_forest/



noteで
発信中!

2023年度活動紹介

各地区の森の学校は、①森を育む、②人を育む、③森で遊ぶを3つの柱として活動を展開しています。

2023年度は、5月以降、新型コロナウイルス感染症が感染症法上の第5類に移行し、コロナ禍前の状況に戻りつつあるなかで、各地区ともに活動を実施した結果、5地区のうち、3地区で参加者数が2022年度より増加しました。

3つの柱～①森を育む、②人を育む、③森で遊ぶ～に基づく各地区の取組み

森を育む



草木染の森づくり【岐阜地区】

古城山ふれあいの森では、草木染に使う染料となる植物を調査採取し、染色後は使った材料を堆肥にして森に返し、自然が循環する森づくりにつとめました。また、藍の生葉染めに使う藍を種から育てて藍の畑を作ったり、染料となる木を植えて育てるなど草木染の森づくりをめざしています。

森を育む



里山保全【広島地区】

広島地区のフィールドは、中山間地にある10haの里山です。20年間、里山整備に加え、生き物の調査を行ってきました。「ネイチャーポジティブ」が注目されているなか、里山の保全に力を入れてきた広島地区のフィールドはその価値が見直されています。今年度は、ネイチャーポジティブの研修会も行いました。今後も生物多様性の視点を踏まえつつ整備を行っていききたいと思います。

人を育む



ものづくり勉強会【新潟地区】

わら細工仲間が中心となって活動している「ものづくり勉強会」では、わらだけでなく、木やつる、ハーブ類など、自然の素材を活かしたものづくりを行っています。飾りだけでなく生活用具や実用品としてのものづくりをめざし、参加者同士がお互いのスキルを教え合い、アイデアを共有することで、より幅のある、オリジナリティあふれる作品を生み出しています。

人を育む



ローカルSDGs人材育成研修【富士山地区】

富士山地区で進められている里山整備活動の実体験と、その活動が必要となる地域社会の背景に触れながら、持続可能な社会づくりについて、自らの考えやあり方、明日からの一歩を探る研修プログラムを実施しています。対象者は20～30代。「SDGs」を自分ごと化するためのプロセスそのものを学び取ります。

森で遊ぶ



里山のようちえん【富士山地区】

幼児親子対象の里山体験プログラム。2023年度は5回開催。里山での暮らしや生業、遊びなどを、各回1泊2日で体験します。「猟師体験とジビエ料理」では、狩猟免許を持つスタッフと一緒に過ごし、野生のシカの生態や、狩猟の方法、いただいた命のおいしい食べ方などを、実体験を通して学習しました。

森で遊ぶ



木工工作【福島地区】

木工班女子部では、^{ほおき}檜の寿司ゲタ、^き朴の木のカッティングボード、^{さんしょう}山椒のすりこ木等の実用的な家庭用品を作成しています。また、木工クラフトの材料作り、教室の準備に時間を割きました。定例の活動以外では、木工クラフト教室の指導に出向き、地域の方々と交流を深めました。

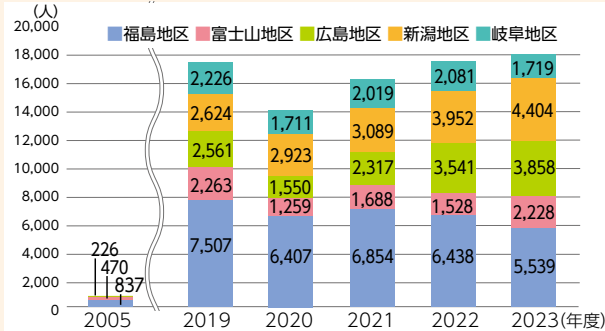
活動実績報告

2023年度末までに26万人を超える方が参加

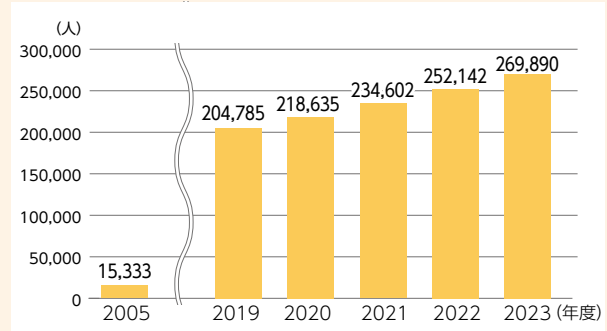
「ろうきん森の学校」は開校から19年目を迎えました。2023年度は、各地区でイベントの開催を再開するなど、さまざまなプログラムを実施しました。延べ参加者数は、5地区合計で17,748人となり、開校から2023年度末までの累計参加者数は269,890人になりました。

今後も、「ろうきん森の学校」各地区NPOと連携し、新たな価値の創出に取り組めます。

「ろうきん森の学校」延べ参加者数(年度別)の推移



「ろうきん森の学校」延べ参加者数(累計)の推移



5地区の紹介／お問い合わせ先

① 富士山地区(静岡県富士宮市他)

現地事務局: NPO法人ホールアース自然学校

富士山のふもと、静岡県富士宮市で活動しています。柚野(ゆの)エリアと田貫湖(たぬきこ)エリアの2つのエリアで、里山の恵みや生きものの多様性を体感できる各種プログラムを展開しています。



③ 新潟地区(新潟県上越市)

現地事務局: NPO法人

かみえちご山里ファン倶楽部

上越市西部中山間地にある活動拠点「くわどり市民の森」からは、地元の集落から日本海まで一望できます。地域の魅力を活用したプログラムのほか、移住促進や地域資源の保全など、中山間地域におけるまちづくり活動に取り組んでいます。



④ 岐阜地区(岐阜県美濃市)

現地事務局: NPO法人

グリーンウッドワーク協会

清流長良川沿い、うだつの上がる町並みと和紙の里として知られる美濃市にあります。生木を使ったものづくりや草木染、竹細工等の体験を通して森林環境の魅力を伝えて、森と人をつなぐ活動に取り組んでいます。



② 福島地区(福島県いわき市)

現地事務局: NPO法人いわきの森に親しむ会

福島県南東部に位置するいわき市にあり、森・川・海のつながりと循環を体験できるフィールドが多数あります。2022年度より「自然学校」を開校し、豊かな自然を最大限に活かした新たなプログラムの開発に取り組んでいます。



⑤ 広島地区(広島県山県郡北広島町)

現地事務局: NPO法人ひろしま自然学校

広島地区は、北広島町にある万代池を囲む10haの里山を中心に活動しています。里山保全、自然体験活動、環境教育等の様々なプログラムを実施しており、幼児から高齢者まで多様な世代の方が森の学校に参加いただいています。



全国事務局・富士山地区

NPO法人ホールアース自然学校

〒419-0305 静岡県富士宮市下柚野165

(全国事務局) <https://www.mori-gakko.net/>

福島地区

NPO法人いわきの森に親しむ会

TEL:0544-66-0790 FAX:0544-67-0567

(ホールアース自然学校) <https://www.wens.gr.jp/>

〒970-8026 福島県いわき市平字北目町95-11

TEL:090-2482-0035 FAX:0246-22-1772 <https://iwaki-mori.jimdo.com/>

新潟地区

NPO法人かみえちご山里ファン倶楽部

〒949-1734 新潟県上越市大字増沢962-1

TEL:025-541-2602 FAX:025-512-1379 <https://kamiechigo.jp/>

岐阜地区

NPO法人グリーンウッドワーク協会

〒501-3701 岐阜県美濃市2973-1

TEL:090-4793-9508 <https://www.greenwoodwork.jp/>

広島地区

NPO法人ひろしま自然学校

〒731-1221 広島県山県郡北広島町今吉田1197

TEL:080-4069-0786 <https://hs-gakko.org>

ろうきん森の学校 20 周年記念シンポジウム 報告書

発行：2025 年 3 月

編集：ろうきん森の学校全国事務局（NPO 法人ホールアース自然学校内）

〒419-0305 静岡県富士宮市下柚野 165

TEL：0544-66-0790 FAX：0544-67-0567

E-mail：forest@wens.gr.jp